正しい批判はいかにあるべきか（八）

――教条主義批判を装った修正主義――

山本二三丸

まえがき
第一節　予備的注意
第二節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その一）……（以上、本誌第二十一巻第一号所載）
第三節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その二）……（以上、本誌第二十一巻第二号所載）
第四節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その三）……（以上、本誌第二十一巻第三号所載）
第五節　榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その四）……（以上、本誌第二十一巻第四号所載）
第六節　榊氏による修正主義批判（その一）……（以上、本誌第二十二巻第一号所載）
第七節　榊氏による修正主義批判（その二）……（以上、本誌第二十二巻第三号所載）
第八節　榊氏による修正主義批判（その三）……（以上、本誌第二十二巻第四号所載）
第九節　榊氏による修正主義批判（その四）……（以上、本号所載）
第十節　榊氏による修正主義批判（その五）
第十一節　榊氏の「教条主義批判」の客観的意義
むすび

第九節　榊氏による修正主義批判（その四）

一

まずはじめに、「日共指導層」がこれまでの盲従的追随一点張りから一転して、よぎなく「反対」の立場をとるにいたった事情を説明してソ連共産党指導部に対し書き送った最初の公式「弁明書」＝『ソ連共産党中央委員会の書簡（一九六四年四月十八日付）にたいする日本共産党中央委員会の返書』（一九六四年八月二十六日）の中味をちょっとみてみよう。その最初の一部分を読んだだけで、「日共指導層」が、どんなに、忠実無比な弟子として教祖・総本山に献身的に奉仕し、その露骨な裏切りや分裂策動をも甘んじて不問に附し、ひたすらに教祖を中心としての「団結」と「話し合いによる解決」という、教祖にとってもっとも好ましい「提案」を声をからして宣伝してきたかということ、そして、その涙ぐましい懸命の奉仕にもかかわらず、その「不問」の態度がかえって教祖・総本山の「不満」を買ってはげしい「叱責・非難」をあびせられるにいたった「日共指導層」が、なんとかして教祖・総本山と世界中の小ブル的俗物たちにその「苦しい立場」を諒解してもらおうと、どんなに、切々としてその「衷情」を訴えているかということが、ひしひしとわれわれの胸に伝わってくるのである。そこで、つぎに、この『返書』の最初の部分から、とくにきかせどころをえらんでかかげてみよう。

「わが党は、周知のように、一九六一年のソ連共産党第二十二回大会におけるアルバニア労働党への公然とした非難にさいしても、一九六二年末から一九六三年はじめにかけての一連の兄弟党大会における中国共産党やアルバニア労働党などにたいする公然とした攻撃にさいしても、また中印国境紛争やいわゆる『キューバ危機』にさいしても、つねにモスクワ宣言とモスクワ声明の基本方向および兄弟党間の関係についての基準を守りぬくという立場から原則的かつ自主的に、また国際共産主義運動の団結

を考慮して**慎重に行動してきました**」（『日本共産党重要論文集』1＝上、七ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

「第一に、日本共産党がモスクワ声明の規定をふみにじってソ連共産党を公然と攻撃しはじめたという『論拠』として、あなたがたは、わが党の国際情報誌『世界政治資料』や中央機関紙『アカハタ』に国際共産主義運動内部の論争の問題についてのアルバニア労働党や中国共産党の文献が紹介されていることをあげています。

この非難に答えるまえに、国際共産主義運動内部における公開論争はどうしてひきおこされたのか、その責任はだれが負うべきか、この問題を明らかにしておかなければなりません。

一九六〇年の各国共産党労働者党代表者会議から一年もたたないとき、**その声明を乱暴にふみにじって**、突然、ソ連共産党二十二回大会でアルバニア労働党指導部にたいする**公然とした攻撃を開始した**のは、ほかならぬあなたがたです。そのさい、あなたがたは、『発生した意見の不一致を克服する道をさがしもとめるよう公然とよびかけるのがこの問題にたいする唯一の正しいマルクス・レーニン主義的態度だ』とか、『この場合沈黙をまもる態度をとることは、かれらのまちがった反レーニン的行動をつづけるよう奨励することを意味する』とかいって、**こうした乱暴なやりかた**を正当化しようとさえしました。この後さらに、一九六二年の末から一九六三年のはじめにかけておこなわれた東欧および西欧の一連の党の大会で、**公然とした攻撃**は、中国共産党その他にたいして拡大されました。こうした状況のもとで、あなたがたから非難をうけた兄弟党がそれに答えるのは、独立した平等の党として当然の権利です。国際共産主義運動内部における公開論争はこうしてひきおこされたのであり、**その重大な責任が、モスクワ声明を乱暴にふみにじって兄弟党にたいする公然たる攻撃を一方的に開始したあなたがたにあることは、きわめて明白な歴史的事実です。**

さらに、公開論争が開始され、それを新たな反共攻撃に利用するための広範な宣伝や中傷がわが国の反動勢力によってまきちらされているという情勢のもとで、わが党が、すでに論争されている問題を自主的に(?!)紹介し、全党員がこの問題を包括的に研究(?!)できるような措置をとることは、きわめて当然のことです。そのさいこれらの文献をどのような形で紹介するかは、あくまでわが党が自主的に決定すべきことで、外国の兄弟党から注文をつけられるような性質のことがらではありません。しかも、**こんにちの公開論争をひきおこした当の責任者であるあなたがた**には、論文文献の紹介の仕方が気に入らないなどといってわが党を非難する資格(?!)はなおさらありません」（前出一一―一二ページ、傍点、ゴシック体および(?!)―山本）。

「しかも、わが党は、部分核停条約反対の従来の方針から部分核停条約参加へのソ連政府の方向転換が**けっしてゆるがせにで**

きない重大な問題をふくんでおり、これを解明しないと事態の本質を大衆に理解させる活動が困難になることを知りながらも、国際共産主義運動の団結を配慮する立場から、あなたがたが全責任を負っているソ連政府の態度への直接の論評をさけてきたのです。

ところが、あなたがたは、わが党がこのような慎重な配慮をはらってきたにもかかわらず、はじめに指摘したように、一九六三年八月二十五日付『プラウダ』にわが党を公然と名ざしで非難したゲ・ジューコフ同志の論文『広島の声』を発表したのをはじめ、日本共産党と日本人民に部分核停条約支持をおしつけるため不当な攻撃と干渉を強めてきました。このようにして、みずから日ソ両党間の関係を悪化させておきながら、八月三日のわが党幹部会の声明『核兵器全面禁止の旗をかかげ統一を守らなければならない』をもちだして、あなたがたが負うべき両党関係悪化の重大な責任をわが党に転嫁することは、誠実な共産主義者のあいだでは許されない態度だといわなければなりません」（前出、二一ページ、傍点およびゴシック体―山本）。

ここに引用された『返書』の部分がわれわれに物語っている真実の意味は、これをさきに検討した一九六一年から六三年にかけての「国際共産主義運動」にかんする三つの公式文書、すなわち『国際共産主義運動の団結のために、二つの敵とたたかい抜くために』（一九六一年十二月二九日『アカハタ主張』）、『全世界の共産党・労働者党はかたく団結しよう』（一九六三年二月、第八回大会第五回中央委員会総会の決議）、『国際共産主義運動の真の団結と前進のために』（一九六三年十一月十日『アカハタ主張』）の全内容と読みくらべて「包括的に研究」することによってはじめて正確にとらえることができる。われわれは、右の三つの、まさに「論争と闘争」が熾烈の度を刻一刻と加えつつあったその時点において公表された歴史的文書の動かすことのできない文字に依拠して、『返書』の表面上の文字には明示されていないもの、またそこでは甚しく歪められた形でしか示されていないものを、補い、ただすことによって、『返書』のもつ客観的な意味内容をば、つぎに再現すべくこころみることにしたいとおもう。こういう場合には、自他ともにごまかし去るような「理論的」・衒学的表現は絶対禁物である。そこで、わたしは、平易卒直な表現様式を

採ることにする。

『ソ連共産党中央委員会の書簡（一九六四年四月十八付）にたいする日本共産党中央委員会の返書』（一九六四年八月二十六日付）のかくされた真実の意味

「わが党は、一九五六年のソ連共産党第二〇回大会いらい、終始一貫、レーニンの後継者フルシチョフ同志の明示する革命路線をば献身的に守りつづけてきました。第二〇回大会におけるフルシチョフ同志の報告は、真にマルクス・レーニン主義の理論を創造的に発展させた画期的なものであって、わが党指導部がこれを熱烈に歓呼して迎え、フルシチョフ同志およびフルシチョフ同志の報告を賞讃し支持する論文、報告、演説をつぎつぎに発表し、またフルシチョフ報告のうちでとくに最大の理論的貢献をなすものといわれる『平和移行論』をいちはやく『先駆的』に、かつ『創造的』に、一〇〇パーセント摂取して、画期的な『日本共産党綱領』をつくり決定したことは、いまさらくどくどしく申上げるまでもなく、天下周知のところであります。

フルシチョフ同志およびフルシチョフ主義にたいするわが党指導部の熱烈な賞讃と献身的な支持がどんなに強固かつ不動なものであるかということは、一九六一年ソ連共産党第二二回大会に出席したわが党代表団の熱狂的歓呼やけんめいの讃辞によっても、また『フルシチョフ新綱領』を国内向けに大々的に宣伝するためにあらんかぎりの力をつくして奮闘したことによっても、よくおわかりのことと思います。もし、右のようなわが党指導部の献身的忠誠と奉仕についてすこしでも疑問をおもちでしたら、どうか、わが党の『理論的指導者』の一人、**榊利夫**同志がまさに熱誠あふれんばかりに感激をこめて綴り再度にわたって公表した画期的な表題の論文、『人類の夢を実現するもの』および『共産主義の壮大な展望』の、どのページでも開いてちょっとでも見ていただきたいと思います。さすれば、そのよ

うな疑問は、たちどころに氷解してしまうでありましょう。

このようにして、わが党が誠心誠意、フルシチョフ主義を守り、フルシチョフ同志をかしらとするソ連共産党の指導のもとに団結して、もっぱら平和のうちに国際共産主義運動をすすめるべく奮闘していたときに、かねてから国際共産主義運動の内部で発生しつつあった不団結の問題がしだいに重大性を増してきました。しかし、わが党は、節操を守ってフルシチョフ主義を忠実に堅持し、ソ連共産党第二二回大会であなたがたがアルバニア労働党を公然と非難したときにも、あなたがたにたいして非難がましいことや忠告などはいっさいせず、ひたすら『慎重に行動してきました』し、また、一九六二年末から一九六三年はじめにかけての一連の兄弟党の大会における中国共産党、アルバニア労働党にたいするまことに理不尽な公然とした攻撃を目の前にしても、あなたがたへの忠誠と信義をしっかと守って、これらにはひと言も口を出しませんでした。わが党は、国際共産主義運動の団結を破壊し重大な分裂をひきおこすような『公然たる攻撃を一方的に開始したのはあなたがたである』ことは『きわめて明白な歴史的事実である』と十二分に知りながら[1]も、また、こうした公然たる攻撃を開始したあなたがたにたいして断固たたかわないのはマルクス・レーニン主義党として完全に落第ものであり、マルクス・レーニン主義の見地からは絶対に許されない破廉恥行為であるということは十二分に承知していながらも、あなたがたと決裂する恐れのあることをいっさい慎しむことが第一と考え、わが党が献身的に支持しているフルシチョフ主義に疵（キズ）がつかないようできるだけ穏便に、『事なかれ』で時間をして解決させるように、実にあらゆる苦心をはらったものであります。このことは、あなたがたにたいする中国共産党指導部の批判と、わが党がこの問題について公表した『公式主張』とをちょっとでも読みくらべるならば、容易におわかりのことと思います。わが党は、中共指導部の『これは、重大な原則的な問題をめぐっての決定的

な闘争であり、マルクス・レーニン主義の擁護・発展とその改ざん・歪曲とのあいだの、国際共産主義運動の正しい発展とその分裂・攪乱とのあいだの、全くあいいれない敵対的闘争である』という主張を完全に黙殺して、しかもそのような主張が誤りであるという印象をひろく一般におしひろめるために、ことさら、『これは、些末な個々の問題についての意見の相違にすぎない』とか、『意見の相違や内部矛盾はいつでも起りうるものだ』とか、『こういう問題は、実に、国際共産主義運動がりっぱに発展しつつあるからこそ、そのために生じたものであって、むしろそれは運動が着々と発展していることの証左にすぎないのだ』とか、『問題はそのうちに容易に解決されるはずだ』とかいったような、『公式主張』をなんども内外に公表してきました。そればかりでなく、わが党は、この国際的な論争のなかであなたがたの立場がすこしでも悪くなることのないように特別に配慮し、モスクワ声明の原則をふみにじって公然たる攻撃を一方的に開始した責任は全部あなたがただけにあることは十二分に承知していながらも、また、この明白な事実を故意に隠蔽するような試みをすることはマルクス・レーニン主義者としてあるまじき下劣な裏切り行為であることもよーっく知っていながらも、あえて『中共もソ連共産党も双方とも、「宣言」や「声明」がさしめす原則に反する行為をたがいに中止して、問題のただしい解決の条件をつくるべきである』といった喧嘩両成敗式のおしゃべりでお茶をにごし、もっぱら団結の必要を訴えるという形をとって時間をかせぎ、時間の経過がうまく問題を解決してくれて、あなたがたの立場に疵がつくことなく、あなたがたの指導的地位も安泰であるようにと、切に切に願い、つとめてきたものであります。

わが党指導部は、このようにして、心底から敬愛しているフルシチョフ同志とソ連共産党指導部にたいして実に涙ぐましいばかりの献身的努力をはらい、マルクス・レーニン主義の根本原則にもとることも『自主独立』の看板に疵

がつくことも承知の上でなにもかも犠牲にして、フルシチョフ主義の守護と発揚のためにけんめいにたたかってきたのでありますが、こうしたわれわれの『一身の犠牲をもかえりみない』献身的忠誠のほどを、あなたがたは、いったい、すこしも感じとられることがないのでしょうか？

あなたがたは、わが党指導部が論争当事者双方の言分を述べた文章をそのまま並べて公開したことにたいして、はげしい非難を加えていられます。しかし、それは、わが党指導部の真意をまったくくみとられない、早や合点に出たものといわざるをえません。わが党としては、あなたがたにとってもっとも好都合なやり方をいろいろ研究・勘案した結果、最善の方法をとったものです。もしわれわれがあなたがたへの献身的忠誠と信義をとっくにやぶりすてているとしましたならば、きっと『公然たる攻撃を一方的に開始したのは、あなたがたである』ことを明らかにした解説をつけて全資料を公表したにちがいありません。そして、それこそが、真に誠実な共産主義者、マルクス・レーニン主義者の採るべき唯一の道であることは、寸分の疑いをいれないところであります。わが党がそういうことを十二分に知っていながらも、あえて当然つけるべき解説をいっさい省略して、―ちょうど商業新聞や『公平な第三者』がいつもやるやり方で―ただ双方の言分を並べた文章を一緒くたにして公表し、全党員が『勝手気ままに』つまり『包括的に研究できる』ように、―したがってあなたがたへの献身的忠誠はいささかも忘れることなく、むしろこれを基本として『研究できる』ように、―とりはからったのは、あなたがたのためを思えばこそのことなのであります。

部分核停条約の問題にしましても、わが党指導部は、あなたがたの『方向転換がけっしてゆるがせにできない重大な問題をふくんでおり』、マルクス・レーニン主義にたいする許しがたい裏切りであることは十二分に知っていながらも、そして、こうした重大な裏切り行為にたいして断固徹底的に闘争しない者は、かれら自身、裏切りに加担する

者、国際共産主義運動内部の混乱と分裂を煽る憎むべき破壊分子であり、手のつけられない悪質堕落分子でしかないということも十二分に知りながらも、なおかつ、フルシチョフ同志とソ連共産党にたいしてすこしでも批評がましいことを述べてそのためにあなたがたの不興を買ったり『破門』されるようなことは絶対に避けなければならないということを第一に考えて、直接にも間接にも論評らしいことはひと言も口に出さず、ひたすらにあなたがたへのもっとも頼りになる『沈黙の味方』としての立場をつらぬきとおすべく、けんめいの努力を重ねてまいりました。

このようにして、あくまでもフルシチョフ同志とソ連共産党指導部を中核として団結をかため、万事うまく納まるようにと、実に筆舌につくせないほどの苦心と努力をはらいつづけてまいりましたのに、――ああ、それなのに、それなのに、――あなたがたは、『話し合い』による解決というわが党の主張が生ぬるくてお話にならないとか、双方の文献を公表するさいには『沈黙を守って』いないでもっと積極的に中国共産党やアルバニア労働党を非難・攻撃し、ソ連共産党指導部の肩をもつような解説をつけて発表すべきであるのに、そのようにしなかったのはけしからんとか言って、にわかにわが党にたいして非難・攻撃の鉾先きを向けてこられました。いや、まだそれだけでしたら、われわれは、あなたがたへの誠実な信奉者としての立場を放棄するなどという大それたことはけっしてしなかったでしょうし、また、あなたがたにとってもっとも好ましいと考えられる方策をとるようにどんなきりかえをすることもじゅうぶん可能であったのです。そしてまた、われわれも、そうした努力をいささかも惜しまないだけの誠実さを、いまなおもちつづけていることを断言するにはばかりありません。しかし、かえすがえすも残念なことに、あなたがたは、わが党が除名処分にした志賀・鈴木両名をば強力に尻押しして、われわれをやっつけにかかりました。これでは、われわれの立つ瀬は、いったい、どこにあるといえましょうか。ことここにいたって、われわれにはどんな道が

残されていると、お考えでしょうか？　われわれが光栄ある共産党指導部という地位をその手に握っていることを望むならば、――そして、われわれは、たとえ死んでもこの地位はけっして手放すまいとの覚悟でいますので、――どうしても、志賀・鈴木両名を尻おししていられるあなたがたの無体な攻撃の火の粉をふりはらわなければなりません。またそうするためには、よぎなくあなたがたと論争せざるをえない破目におちいることをどうしても避けることはできません。わが党がこれまで献身的に支持し追随してきたフルシチョフ同志およびソ連共産党指導部と決裂し、あなたがたから公然と『破門』を宣告されることは、本当に腸（ハラワタ）をたちきられる思いです。われわれがよぎなくあなたがたと論争するようになったとしても、それは、フルシチョフ同志およびソ連共産党指導部がまったく重大な誤りを犯したとか裏切り行為があったとかいうようなことによるのではけっしてなく、また、フルシチョフ同志にたいして、フルシチョフ主義にたいして深刻な疑惑と不満を抱くようになったがためというのでも、けっしてありません。このことは、わが党が、フルシチョフ同志の創造的路線を一〇〇パーセント忠実にとりいれてつくった『日共綱領』を一貫して堅持しているという、たったひとつの事実をみても、よーっくおわかりのことと思います。われわれは、マルクス・レーニン主義を現代に創造的に適用して、『平和共存』、『平和競争』、『平和移行』という輝かしい世界革命路線をきずきあげたフルシチョフ主義は、完全に正しく、またこのうえもなくすばらしいものと、かたくかたく確信しているものであります。

わが党が、まったくもって不本意ながらも、よぎなくあなたがたと論争することになったのは、ひとえに、あの憎むべき志賀・鈴木両名がわれわれから指導権を奪おうとしたからでありますし、その憎むべき裏切分子どもにあなたがたがすくなからず力をかしていられるからであります。まことに憎いのは、かれら両名です。かれらをどんなにひ

どく呼んでも、たとえば反党売党分子などと名づけてみても、とうていあきたらないほどです。もしこの両名がいなければ、あなたがたとわれわれとの間は、すぐれた教祖とその忠実無比な弟子との間のように、まことになごやかでしっくりしており、すばらしい団結が達成されて国際共産主義運動を真に効果的に発展させていたであろうことは、寸分の疑いもさしはさむ余地はありません。でありますから、あの憎むべき両名への尻おしを即座にやめていただくことができれば、われわれとしても、あえて、あなたがたにたいして、このんで楯をつくなどという意志は毛頭ないのであります。

しかしながら、あなたがたのわれわれにたいする非難・攻撃は、なんと容赦なく、手きびしいことでしょうか。そのごり押しの非難・攻撃をみていますと、われわれとしては、これまで絶対に信頼をよせてきたフルシチョフ同志とソ連共産党指導部が、またっく血迷ってしまったものとしか思われないのであります。この忠実無比な弟子の献身的奉仕にたいして、光栄ある教祖と総本山が常軌を逸したてきびしい攻撃と干渉をもって報いられるとは！　ああ、ここにいたっては、もはや止むをえません。わわわれは、身にふりかかる火の粉をはらいのけるために、日共指導部という得がたい地位を死守するために、あなたがたの理不尽な非難・攻撃にたいして、断固反駁することに決心いたしました。しかし、ここでぜひとも諒解しておいていただきたいのは、われわれの反論が、けっして積極的な批判や攻撃などというものではないということ、それは、中国共産党指導部があなたがたにたいしておこなっている徹底的な批判・攻撃などとは似ても似つかぬものだということです。われわれの、教祖と総本山にたいする信頼は、いまもって三年前、いや八年前といささかも変りないものと、われわれはかたく信じております。われわれがひたすらにこいねがうところは、あなたがたが今回一時的におかした誤りと非をさとられ、わが党にたいする不当な干渉や攻撃

をいっさい中止され、志賀・鈴木両名と完全に手をきられること、これであります。もし、あなたがたがこれまでの聡明さと決断とをもって右のような適切な処置をとってくださるならば、われわれは、あなたがたと以前のようにうるわしい団結をとりもどし、かたくかたく腕を組んで世界共産主義運動の先頭に立って、たたかい、前進することができましょう。これこそ、われわれが衷心から待望しているところであり、また、そのために今後ともあらんかぎりの努力をはらっていかなければならないものと、われわれはかたくかたく信じております。どうか、われわれの衷情と意のあるところをあやまりなくくみとられたうえで、これまでのように真のマルクス・レーニン主義の地盤の上に立って善処し、適切な方策を創造的にうちだし、世界共産主義運動の先頭に立ってすすんでくださるよう、切に切に望むものであります。」

（1）ソ連共産党中央委員会の非難・攻撃をこうむり、自己保身のため抗弁する必要から書かれたこの『返書』のなかでは、行きがかり上、もちろん、「その重大な責任が、声明を乱暴にふみにじって兄弟党にたいする公然たる攻撃を一方的に開始したあなたがたにあることは、きわめて明白な歴史的事実です」と書かなければ、体裁がとれない。だから、第二二回大会後三年近くたってから、つまりずーっとあとになって、自己弁護のため書かれたこの『返書』に重点においてこれをもとにして文章をつくるならば、ここのところにあるように、「『きわめて明白な歴史的事実である』と十二分に知りながらも」という文章ができあがることになる。しかし、第二二回大会当時のフルシチョフ教祖への熱狂的追随ぶりや、一九六一年十二月の『アカハタ主張』や、一九六三年二月の「第八回大会第五回中央委員会総会決議」に重点をおいてこれらをもとにして文章をつくれば、右のようなお体裁のための文章とはうってかわって、それと正反対の内容のものに、つまり、「『きわめて明白な歴史的事実である』ということなどつゆ知らずにいたために、『個々の問題についての意見のちがいがあらわれてくるのは当然である、それは一時的なもので必ず解決されるものだ』と主張して、大いに団結の必要と可能性をうたったものである」という文章にならざるをえない。そして右の二つの文章のうちどちらが歴史的真実に完全に合致したものかといえば、もちろん、後者

の方が真実に合っていることは明らかである。前者の文章が、例によって「いつでもあとから妥当に是正する」という独自的「品性」の発露の産物にほかならないということを、いったい、見ぬけない人間がいるだろうか！　だが、たとえ独自的「品性」の発露にまかせてこのようにあとから一応聞えのよいように、ありもしない「事実」を並べてデッチ上げをしたとしても、それはそれで、かえって「わが国のマルクス・レーニン主義者」たち自身の底知れない無能と惑乱と無節操とを暴露してくれるだけの効果しかもたないことになるのは、いかんともしがたい。というのは、いかに独自的「品性」を発揮してみても、一九六一年から一九六三年にかけて公表した諸『主張』は、取消すことのできない厳然たる歴史的記録としてのこっており、これらの公式文書とあとからデッチ上げた文章とを並べてみるだけで、かれらの独自的な「品性」と「能力」と「性向」は、浮き彫り的に明瞭になるからである。

二

右のような『返書』が出されてから二ヵ月もたたない一九六四年十月半ばに、突如として、フルシチョフが「第一書記」の地位を解任されるという事件がもちあがった。これまでの輝かしい教祖は、いまやその台座から永久におわれるにいたった。もし部分核停条約の問題が、したがって、また志賀・鈴木両氏の除名問題が、事実あったより半年おくれて一九六四年十一月ごろ勃発したとするならば、いったい、どういうことになっていたろうか？　そのときには、「日共指導層」は、『返書』を作文する必要もなく、ソ連共産党指導部との間にはこれまで同様緊密な協力関係＝師弟関係がつづいていたことであろうし、したがって、フルシチョフ失脚の報を前にして忠実無比な弟子どもは、一途に帰依していた教祖を失って、さぞかし途方にくれ、面目丸つぶれとなり、救いようのない混乱におちいっていたことであろう。この世においては、なにが幸いするか、まったくわからないものである！　部分核停条約の問題が半年早くもちあがり、志賀・鈴木両氏がこれに「賛成投票」してくれたとは、なんとありがたいことであったろう

か！　ひとえにそれらのおかげで、「日共指導層」は、「解任されるはずの教祖」にたいして一応「反論」しなければならない立場におかれることになり、したがってそのおかげで、教祖に盲従していたのではないという体裁をとりつくろうことができたのである。しかし、そうした体裁を辛うじてたもつことができたとしても、まだそれでかつての弟子の「宗旨変え」がことなく認められるというわけにはいかない。ひとたびよぎなくはじめた「論争」は、一応の「結着」にもちこむまで続けられなくてはならない。直接の当事者たる教祖は退陣しても、教祖の教えを守り布教につとめる総本山そのものは安泰である。そこで、「反論」者＝「日共指導層」は、まず、なぜフルシチョフ教祖が失脚するにいたったかということを、ひろく説明する義務を負わざるをえないことになる。行きがかり上やむをえない説明であるとはいえ、この「教祖失脚の理由」をどのように説明するかは、決定的な意義をもっている。というのは、その説明の仕方のなかに、「反論」者の教祖・総本山にたいするありのままの考え方がおのづと示されるからであり、したがって、その「反論」者が真のマルクス・レーニン主義の立場をつらぬいているものであるか、それとも、その反対に、些末なお体裁だけの論争をあれこれあげつらって、フルシチョフ修正主義の重大な誤謬、改ざん、裏切りについてはひとことともふれることなく、結局はフルシチョフ主義の黙認ないしは不問という本来の姿勢を守りとおす結果となっているかということが、いやおうなしに明るみに出てくるからである。そこでつぎに、これまで教祖を支持する弟子どものなかでもっとも忠実な高弟の地位をほこっていた「日共指導層」が、突然の「教祖失脚」にたいして、どのような説明をあたえているかということをみることにしよう。

フルシチョフ「解任」後二日、一九六四年十月十六日に、日共宮本書記長が記者会見で述べた見解が、『修正主義路線の矛盾のあらわれ、真のマルクス・レーニン主義への復帰を望む』という表題をつけて公表されている。そのな

かから、比較的重要な意味をもっていると思われる個所を抜粋してつぎにかかげ、簡単な注釈を加えてみることにしよう（引用は、『日本共産党重要論文集』2による）。

「問　こんどのフルシチョフの辞任をどうみるか。

宮本書記長　いちおう健康上の理由ということになっているが、この時期にこういうやめ方をしたということは複雑な問題をふくんでいる。われわれとしても、公然とソ連共産党指導部と論争しており、その中心にフルシチョフがいたわけである。

かれがこういう形でやめたということは、われわれはやはりフルシチョフを中心とするソ連共産党指導部の政策のもつ矛盾が、こういう形であらわれたという意味において非常に重要な事件だと考える。

われわれはもともとソ連共産党とは歴史的な友好関係にあった。しかし最近フルシチョフを先頭とする指導部からの不当な攻撃とか、あるいはかく乱工作、あるいは誤った路線のおしつけなどによって関係が悪化した。われわれの主張、われわれの確信というものは、非常にはっきりしている。こういう機会にソ連共産党指導部が従来のわが党にたいする態度だけでなく、内外の問題にわたってもっと根本的に考えなおすようになることをわれわれは希望する」（前出、三―四ページ、傍点―山本）。

ここに示された宮本氏の答えについては、その順序を逆にして、終りの方から読んでいかなければいけない。つまり、こうである、――「日共指導層」は「もともとソ連共産党とは歴史的にながいあいだ緊密な友好関係にあった」のであって、フルシチョフ教祖にたいするその献身的信奉の点では一点の非のうちどころもなかったものであるが、教祖・総本山がごく最近になって、つまり近々半年ほど前から、わが党に「不当な攻撃とか、あるいはかく乱工作、あるいは誤った路線のおしつけなど」してきたために、ここにきてにわかに「関係が悪化した」ものである。そのために、「不当な攻撃とか、あるいはかく乱工作、あるいは誤った路線のおしつけなど」にたいして、わが党は反対し、それらにたいしてよぎなく公然と「論争」をしているところだが、これによってもわかるように、こうした不当なやり方、つまり「フルシチョフ

を中心とするソ連共産党指導部の政策がもっている矛盾」のために、フルシチョフは解任されることになった。だから、こうした不当なやり方を「全面的に」、つまり「わが党にたいする態度だけでなく、内外の問題にわたって根本的に考えなおすようにな」れば、問題は事なく解決されるのであって、われわれ「日共指導層」はこのことを強く望んでいるものである。最初に「複雑な問題をふくんでいる」と言ったのは、こういう意味においてである、――というしだいである。俗物は、他人の出来事についても、いつでも自分自身の尺度つまり俗物の尺度でしかはかることはできない。「フルシチョフはなぜ解任されたか？」――「それは、われわれに加えたような不当な攻撃とか、かく乱工作とか誤った路線のおしつけとかいったような、不当なやり方＝誤った政策を内外にわたってとってきたからである。そうした政策のもつ矛盾があらわれたものである」。それゆえ、フルシチョフとソ連共産党指導部の「基本方針」は従来とすこしも変りなく一貫しており、この「基本方針」にたいしては「日共指導層」は従来から「歴史的に献身的な支持・宣伝」を惜しまなかったのであるから、こと「基本方針」＝フルシチョフ主義そのものについては、「矛盾」も「破綻」も認められないものであるし、この点については「日共指導層」も従来どおり「緊密な友好関係」つまり「献身的支持」の立場を一貫して堅持しているということにならざるをえない。しかし、他方、フルシチョフおよびソ連共産党指導部のマルクス・レーニン主義の基本原則の改ざん・歪曲・修正にたいする中国共産党指導部の側からの非難・攻撃はまことに仮借するところなく、フルシチョフの「修正主義」とか「修正主義路線」という厳密な規定が頻繁につかわれてきているという状況を目の前にしているので、このさい、「フルシチョフ修正主義」などという、これまで考えてもみなかったような「術語」をつかうことが「最小の労力で最大の効果をあげる」秘訣と考えたものであろう、「日共指導層」は、これから以後、にわかに右の「術語」をつかって、これまでの「忠実無比な弟子」という

正体をおしかくし、「失脚したフルシチョフ」にたいして「論争しつつある敵対者」という体裁と印象をばにわかにつくりだすことに、けんめいの努力を傾けることになる。

「問　フルシチョフ路線の修正主義による破たんというが、どういう点で破たんしたのか。

宮本書記長　まだ発表は健康上の理由といっており、それ以上のこまかい正確な材料はないから立ちいってあまり推理小説的なことはいえない。しかしいずれにしてもこういう時期に、こういうやめ方をしたということは、政治的に重要な意味のある問題で、われわれは、かねてソ連共産党指導部からの挑戦にこたえてその路線の誤りを批判して論争してきたわけだけれども、われわれの立場からいえば、かれらがもっている内部的矛盾、誤った路線がもっている内部的矛盾の一つの政治的な現われであるということである。

問　現在、いちばんフルシチョフ路線の重要な矛盾は、どの部分に現われたと思うか。

宮本書記長　やはり国際共産主義運動にたいするフルシチョフを先頭とするソ連共産党指導部のやってきた路線が、実際上非常な困難にぶつかっているということで、われわれからいえばこれが一番大きな問題だと思う。もちろん、ほかにも対外的、対内的にもいろいろ重要問題があるだろうが。

問　具体的に破たんのモメントとなったものを上げるとすればなんだと考えるか。

宮本書記長　それはまだ断定したくない。というのは政治的に公式な発表が、健康上の理由でやめたというだけだから、われわれはいろいろ推測はできるが、しかし公式にはあまりまだ立ちいってみてきたようなことは言わない」（前出、五―六ページ、傍点―山本）。

宮本書記長自身が「フルシチョフ解任」をば「いわゆるフルシチョフ修正主義」の「破たんの一つの明白な現われである」（前出、四ページ、傍点―山本）とはっきり答えたからこそ、質問者は、「どういう点で破たんしたのか」という当然の問いを出したのである。ところがこの書記長氏は、なんとあきれたことに、「破たんの明白な現われだ」と見えをきってはみたものの、「公式の発表が健康上の理由といっているだけで、それ以上のこまかい正確な材料はないから」という

「理由」で、「立ちいってあまり推理小説的なことはいえない」とか、「いろいろ推測はできるが、しかし公式にはあまりまだ立ちいって見てきたようなことは言わない」とか、なんとも情ない「逃げ口上」を並べたてているのである。およそ「公式の発表」で、「健康上の理由でやめた」というような形式的なものではなく、「主義の誤りや路線の破綻でやめた」などという「退任理由」を書きたてるような愚か者が、いったい、どこの国にいるだろうか？　「公式の発表が健康上の理由といっているだけだから、それ以上はっきりしたことはいえない」などと「逃げ」をうっているのは、当人自身、前衛党の指導者などという大それた地位にはまったく似つかわしくない、愚かで無能な小ブル的俗物だということを告白しているようなものである。「明白な現われ」と広言しながら、「では、どういう点でか？」ときかえされると、「あまり推理小説的なことはいえない」とか、「いろいろ推測はできるが、しかし公式にはあまりまだ立ちいって見てきたようなことは言わない」とか、聞くにたえない「口上」をならべる。「あまり推理小説的なことはいえない」というなら、「すこしは推理小説的なことはいえる」とでもいうのか？　「解任の事情」などは、たとえ「見に行った」とて、とうてい「見てこれる」ようなものではないのだ。「あまりまだ立ちいって見てきたようなことは言わない」というなら、「すこしは立ちいって見てきたようなことなら言える」とでもいうのか？　同じ「逃げ口上」をならべるにしても、なんという間の抜けた、おろかな「口上」であろうか！　これこそ、フルシチョフ主義の忠実な追随者＝似而非指導者の底なしの無為無能ぶりの恰好の見本でなくてなんであろうか！

宮本氏は、「かねてソ連共産党指導部からの挑戦にこたえてその路線の誤りを批判して論争してきたわけだけれども」などと聞えのよいはったりを並べているが、こういう空文句は、さきの「われわれはもともとソ連共産党とは歴史的な友好関係にあった。しかし最近フルシチョフを先頭とする指導部からの不当な攻撃とか、あるいはかく乱工作、あるいは誤った路線の押しつ

けなどによって関係が悪化した」という、宮本氏自身の御叮嚀な解説と真っ向うから矛盾し撞着するものである。「日共指導層」が「挑戦にこたえて論争してきた」のは、精々のところ半年たらず前からのことで、とうてい「かねて……してきたわけだ」などとほらをふけた代物(シロモノ)ではない。「かねて……してきた」という文句がぴったりあてはまるのは、まさに、八年以上ものあいだずっとフルシチョフ主義とフルシチョフ路線に完全に盲従してきたという事実についてでなければならぬ。また、教祖・総本山からの非難・攻撃をうけて保身上よぎなく「公然と論争」せざるをえなくなったのも、氏自身明言しているように、「不当な攻撃、かく乱工作、誤った路線の押しつけ」にぶつかったからこそであって、「フルシチョフ路線の誤りを批判し論争してきた」などということは薬にしたくともなかったものである。

ここで、宮本書記長の奇妙な「発想方法」ないしは「思考能力」を示すものとしてとくに興味をひくのは、「かれらがもっている内部的矛盾、誤った路線がもっている内部的矛盾」という文句である。この「内部的矛盾」という、周知の毛沢東論文からわけわからずに無断で引きぬいてきた言葉は、その「品性」にふさわしく、「日共指導層」のごとく愛好するところであって、われわれは、すでに一九六一年十二月の『アカハタ主張』や一九六三年二月の「第八回大会第五回中委総会の決議」などの中でこの言葉を再三聞かされたものである。(2) つまり、つい半年前までは、「ひとつの党のなかでも、意見の相違や内部矛盾は当然起りうることであって、それは不可避である。内部矛盾は前進途上にあるからこそ起るものであり、それはかならず正しく解決されるものである」という説明をくりかえし並べたてフルシチョフ教祖・総本山との団結の必要をうむことなくうたっていたその忠実な弟子どもが、今度はたちまち手のうらをかえして、「内部矛盾は、その路線が誤っており、実際上非常な困難にぶつかっているからこそ生じたものだ」という主張をかかげ、「内部矛盾」について完全に正反対の考え方を押しつけておいて、そのあからさまな「自己矛盾」にすら気がつかず、平

気でいるのである！

（2）本論稿（七）の「六」（本誌第二十二巻第四号、七五―七六ページ）参照。

「問　われわれが考えられるのは中ソ対立とか、国内問題、とくに農業分野における失敗の問題、また米ソの核戦略のなかで、軍部との対立があったということもいわれているが、こうした問題のなかでどちらが大きいと考えるか。

宮本書記長　対外的ないろいろな政策、国際共産主義運動にたいする態度をふくめた問題と対内政策とは結びついた問題である。われわれが、みずから関係し、またぶつかっている問題としては国際共産主義運動の問題がある。これはわれわれ自身が、ソ連共産党指導部との論争の当事者だから。またどういう点が、どういうふうにまちがっているかということを詳細に反論しているわけである。国際会議のやり方の問題とか、あるいはほかの共産党にたいする態度が依然として大国主義を押しつけているとか、あるいは他の共産党、たとえばわが党などが無批判的に盲従しないと、こんどは党から除名された連中を公然と支持して党の分裂をはかっている。こういうことは共産主義運動のイロハからいって、まじめな共産党では問題にならない。こうしたことにたいして、われわれは公然と批判をしてきたし、こういうやり方をすると、非常に大きな無理が出てくる。そういう無理はいつまでもつづかないし、いつかはより深刻な困難にぶつかるわけである。その困難のぶつかり方、あるいは破たんのしかたというものは、いろいろな現われがある。いまは指導部の内部的矛盾という形で中心指導者の取りかえという形であらわれている。

問　指導部の内部矛盾ということは、つまりクレムリンの内部である種の権力闘争がおこなわれたというふうにいえるのか。

宮本書記長　それは、はっきり断定できない。つまりどういう現われ方をしているかということは……。

問　それに近い現象が起きたといえるか。

宮本書記長　それもまだ、なんともいえない」（前出六―七ページ、傍点―山本）。

記者たちの「具体的に破たんのモメントになったものは、なんだと考えるか」という肝腎の質問にたいして、「断定したくない」とか、「公式にはあまりまだ立ちいって見てきたようなことは言わない」とかいった、思わせぶりな愚答しか言えないからこそ、記者たちは、「健康上の理由」という「公式の発表」しかわからない気の毒な書記長のために、わざわ

ざ「中ソ対立」とか「農業分野における失敗の問題」とかいう「情報」を提供してやって、それらのうちで「どちらが大きいと考えるか」というように親切に教えかつ質問を出してやっている。ところが、「あまり推理小説的なことはいえない」などとしかいえない無能な書記長は、こうした親切な質問の意味がさっぱりわけわからず、「対外政策の問題は、対内政策と結びついた問題である」などという、全く見当はずれの愚にもつかぬおしゃべりを並べて、すぐさま話の筋を、自分たち自身切実な関心をもつ例の「不当な攻撃やかく乱工作や誤った路線の押しつけ」にもってくる。小ブル的俗物の念頭を占めてはなれないのは、もちろん、「基本原則」や「社会主義発展の路線」の問題などではけっしてなく、ただただ、自身が直接に関係している「論争」問題だけである。気がかりなのは、わが身の上、わが身に直接ひびくことだけである。そこで、例の「不当な攻撃やかく乱工作や誤った路線の押しつけ」というやり方が「非常に大きな無理を生み、それがまたより深刻な困難にぶつかる」などと言って、「フルシチョフ側の負け、わが党の勝ち」を大いに強調する。ところが、この俗物的おしゃべりが度をすごして、その「破綻」が「いまは指導部の内部的矛盾という形で中心指導者の取りかえという形であらわれている」などと口がすべったので、たちまち記者たちから、その「指導部の内部矛盾とはどういうことか」とたたみかけられて、なんと醜態にも、「それは、はっきり断定できない」とか「それもまだなんともいえない」などと、答えにもならぬ答えをならべているのである。「はっきり断定できない」し「なんともいえない」のに、「指導部の内部的矛盾という形であらわれている」とか「中心指導者の取りかえという形であらわれている」などと、よくもまあ、図々しく言えたものである！　「あらわれている」といいながら「はっきりわからない」とは、なんという無能でハッタリ屋のあきめくらであろうか！

「問　国際共産主義運動の内部での対立状態が、こんご緩和されるような方向にむかう希望がでてきたというふうにいえるか。

宮本書記長　そこまでいうと少し甘くなりすぎるかもわからない。ああいう形で、もう長期にわたって党の指導部が公式に誤った方針をだして、それをがん強に押してきている。ところが従来のカジの取り手ではもうだめになったということは、そういう路線の未来に大きな影響を与える事件だと思う。

しかし、それをすぐに、いま修正主義とマルクス・レーニン主義との闘争での一番困難な問題を解決したというように簡単にはいえない。というのは一つの党の指導部の方針というのは、一つの歴史的な経過によって、また一つの体制によってできている。指導部の中心が取り変わったというだけで、従来の誤りがすぐ正され、公然と誤りを認めるというような形では単純にすすまないのが歴史の動きである。

しかし少なくともこういうことはいえる。われわれ日本共産党をふくむ真のマルクス・レーニン主義の路線を堅持している党にとっての困難というのは前進途上の困難である。しかし誤った修正主義の路線のもつ困難というものは、これは全体としては国際共産主義運動のなかで敗北してゆく過程のなかでの困難であり、破たんである。これで論争問題はメドがついたとは簡単にはいえないが、この二つの路線の闘争において結局、誤った路線を固執するものは、いろいろな段階で、いろいろな矛盾を、さまざまな形で深刻な内部矛盾を暴露せざるをえないということをこんどの事件は現わしたということがいえる」(前出、七―八ページ、傍点―山本)。

ごらんのように、宮本氏は、現「論敵」にたいして、「ああいう形で、もう長期にわたって党の指導部が公式に誤った方針をだして、それをがん強に押してきている」などときこえのよい文句を並べているが、フルシチョフ教祖と総本山が「公式に誤った方針を出してそれをがん強に押してきている」のは、実に一九五六年第二〇回大会いらいのことであり、そのフルシチョフ主義の「誤った方針」にたいして献身的信奉を「がん強に」守ってきたのは、ほかならぬ宮本氏らの一党であって、このことは天下にかくれもない事実である。それゆえ、宮本氏自身主張しているように、ここに来てわずか半年やそこらで「一つの党の指導部の方針というのは」簡単に変わるようなものではけっしてなく、「従来の誤りがすぐ正され、公然と誤りを認めるというような形では単純にすすまないのが歴史の動きであ」って、「日共指導層」がこれまで献身的

に信奉し遵守してきたフルシチョフ主義をすぐさま放擲するとか、フルシチョフ式路線の誤りをすぐさま訂正するとか、いわんやそういうフルシチョフ主義追随の誤りを公然と認めるなどということは、天地がひっくりかえってもおこりえないというのが、まこと「歴史の動き」、「歴史の法則」なのである。だから、こういう「歴史の法則」をばさももっともらしく説きながらも、すぐそのあとで「われわれ日本共産党をふくむ真のマルクス・レーニン主義の路線を堅持している党」などという手前勝手な文句を並べて「歴史の動き」をごまかしふみにじって平気の平左でいられるというのも、そしてまた、「昨日の教祖＝今日の論敵」は「敗北してゆく過程」にあるが「昨日までの弟子＝日共指導層」は「前進途上に」あるのだなどという宣伝文句ばかりで「論争問題のメドをつける」という体裁をとりつくろわなければならないというのも、すべてはひとえに、「あとからいつでも妥当に是正する」という独自的「品性」そのものの「自主独立」的発露にほかならないのであって、こうしたことはまた、すべからく「歴史の法則」の貫徹ということを動かしがたく実証するものというべきなのである。ところで、――なんと、以上が、「フルシチョフ解任」の理由について「日共指導層」がわれわれに示してくれる「説明」の全部なのである！

(3) この、頑強な必然性をもってつらぬいている「歴史の法則」は、「フルシチョフ解任」についての宮本書記長の説明と、同じ問題についての中国共産党指導部の説明とを読みくらべることによって、いっそう理解しやすいものとなる。この二つの説明を対比してみれば、一九五六年第二〇回大会いらい終始一貫忠実無比な弟子として教祖・総本山に献身的に師事し追随してきながら、つい半年ほど前にわかによぎなく「反論」せざるをえない破目におちいった修正主義的指導層の自己保身＝宣伝的おしゃべりが、第二〇回大会いらい終始一貫マルクス・レーニン主義の基本原則を守ってフルシチョフ主義にたいし断固たる闘争を展開してきた真のマルクス・レーニン主義党指導部のレーニン的批判からどんなにかけはなれているかということが、疑う余地なく明白となってくる。そこで、宮本書記長の説明の修正主義的・俗物的本質を的確にとらえるよすがとして、つぎに『フルシチョフはなぜ退陣したか』という表題の「紅旗」社説（一九六四年十一月二十一日）のなかから、要点をとりだし

てかかげてみよう。

「紅旗」社説は、まず「フルシチョフの失脚は、修正主義反対闘争を堅持してきた全世界のマルクス・レーニン主義者の偉大な勝利であり、現代修正主義の大きな破たん、大きな失敗を示すものである」と述べて、「フルシチョフ失脚」の客観的意義を明示し、つづいて、「フルシチョフはいったいなぜ退陣したのか、なぜやっていけなくなったのか」という問題を出し、これにたいして、その「理由」をつぎのように説明している。

「人びとはフルシチョフ失脚の原因について説明するのに無数の罪状をかぞえあげることができる。だが、いくらかぞえあげてみても、もっとも根本的な罪状はただひとつ、つまり、かれがマルクス・レーニン主義のさしめす社会・歴史の発展法則にそむき、ソ連人民と世界人民の革命的な意志にそむいて、歴史の前進をはばもうと企てたことである。人民の前進途上に石があれば、それを取りのぞかなければならない。フルシチョフのやからが望むと望まないとにかかわりなく、しょせん、人民はかれを投げすててしまうのである。フルシチョフの退陣はまさしく、ソ連人民と世界の革命的人民が修正主義反対闘争を堅持してきた必然的な結果にほかならない。

われわれの時代は、世界資本主義と帝国主義が滅亡にむかい、社会主義と共産主義が勝利にむかう時代である。この時代がわれわれにあたえた歴史的使命は、各国の具体的条件にもとづき、各国人民じしんの手によって、プロレタリア世界革命の完全な勝利をしだいに実現してゆき、帝国主義もなく、資本主義もなく、搾取制度もない新しい世界をうちたてることである。これは、歴史的発展の必然的な趨勢であり、全世界の革命的人民の共通の要求である。この歴史の趨勢は、人びとの意志では左右できない客観的法則であり、いかなる力もこれにさからうことはできない。だが、フルシチョフという現代政治舞台の道化役者は、あくまで逆コースをとり、歴史の車輪を資本主義のふるい道へ引きもどして、死にかかった搾取階級と搾取制度の寿命をひきのばそうと夢みていた。

フルシチョフは、これまでの日和見主義、修正主義のあらゆる反マルクス主義的観点をかきあつめて、いわゆる『平和共存』『平和競争』『平和移行』『全人民の国家』『全人民の党』という体系だった修正主義路線にまとめあげた。かれは帝国主義にたいして降伏主義を実行し、階級協調論によって各国人民の革命闘争を解消し、これに反対した。かれは国際共産主義運動のなかで分裂主義を実行し、大国排外主義をプロレタリア国際主義にとってかわらせた。かれは、国内でやっきとなってプロレタリアート独裁を瓦解させ、ブルジョアジーの思想、政治、経済、文化を社会主義制度にとってかわらせ、資本主義復

活の道をすすもうとした」（傍点―山本）。

「社説」は、フルシチョフの「罪状」をまとめて十二――一、いわゆる「個人迷信反対」によるスターリン攻撃、二、アメリカ帝国主義との「全面的な協力」、三、部分核停止条約の締結、四、「平和移行」＝「議会の道」の主張、五、「平和共存」による民族解放闘争の弾圧、六、裏切り者チトーと結託、七、アルバニア攻撃、八、中国共産党および中国にたいする攻撃、九、兄弟国にたいする干渉と従属化、十、兄弟党にたいする干渉・分裂策動、十一、国際共産主義運動にたいする分裂策動、十二、「資本主義復活の道」の推進。――を列挙し、「フルシチョフというこの人物が失脚したのは、けっして老齢とか健康状態の悪化とかのためではなく、また単にかれの仕事のやり方や指導作風のあやまりのためでもなく、かれが修正主義の総路線と一連のあやまった対内、対外政策をおしすすめた結果にほかならない」と述べ、「歴史の流れを逆転させようとするものはすべてぺしゃんこにおしつぶされる」という「法則」を指摘し、毛沢東の有名な詩詞―「人間正道是滄桑」―を引いて、つぎのように説明している。

「……フルシチョフもその例にもれない。往時をおもいおこすと、ソ連共産党第二〇回大会と第二二回大会でスターリンに大いに反対し、マルクス・レーニン主義に大いに反対したとき、またブカレスト会議でマルクス・レーニン主義を堅持する中国共産党に不意打ちをかけてきたとき、そのときの彼の鼻息はまことにすさまじいものだった。ところが、その後まもなく、この反ソ、反共、反中国の『英雄』は修正主義の先輩の後塵を拝することとなった。人びとがどんなに正道にかえるようにとすすめても、かれは全然耳をかさず、ついに自分自身を死地においこんでしまった。

フルシチョフは失脚した。かれがひたすらおしすすめてきた修正主義路線も破産してしまった。だが、マルクス・レーニン主義は今後も修正主義思潮をたえずうちまかして、いっそうの発展をつづけるであろう。各国人民の革命運動もあいかわらず前進途上の障害をたえずとりのぞいて、発展しつづけるであろう。

もちろん、歴史の道は依然としてまがりくねったものである。フルシチョフが失脚したとはいえ、かれの支持者であるアメリカ帝国主義、各国の反動派、**現代修正主義分子**はけっしてあきらめてはいない。これらの妖怪変化のたぐいはいまなお、呪文を唱えてフルシチョフの『魂をよびもどし』、いたるところでフルシチョフの『貢献』と『功績』なるものを宣伝し、これまでどおりフルシチョフの定めた路線にそって事がはこばれ、いわゆる『フルシチョフなきフルシチョフ主義』が実行されるよう夢みている。だが、この道は通れない――われわれはそう断言できる」（ゴシック体―山本）。

正しい批判はいかにあるべきか

この「社説」が明示しているように、かのフルシチョフが「歴史の車輪の前進をおしとどめようとした」「英雄的人物」、「大立物」であったとすれば、第二〇回および第二二回大会でこの「大立物」に懸命の拍手をおくりフルシチョフ主義・フルシチョフ路線の支持・宣伝に血道をあげた「べったり尻つき」の似而非「指導層」は、まさに「親分をなくした小物」どもでしかない。こういう手合が、「平和移行」＝「議会の道」というフルシチョフ主義の「なきがら」を後生大事と「守り本尊」（＝綱領）にして「指導者」の地位にしがみついていながら、フルシチョフにむかって「非難・攻撃」をあびせたとて、いったい、どこに、まじめに耳をかす者がいようか！

三

さて、これまでまこと教祖と仰ぎ杖とも柱ともたのんで献身的に帰依していた当のフルシチョフが失敗したとなれば、信義などよりもわが身第一の俗物的弟子どもが真っ先きに考えることは、むかしからの「腐れ縁」をいちはやくもみ消してしまうこと、「自分はもともと教祖とは無縁で、むしろ批判的だったのだ」という、虚偽の印象をいちはやくつくりだすこと、これである。それは、この俗物的弟子どもが、いまなお、教祖の教え＝「平和移行論」を「守り本尊」としてその「綱領」の中核にすえているだけに、ますます切実かつ緊急なものとなる。これまでの自分たちじしんの教祖への讃歌をもみ消すには、いよいよできるだけ声を張りあげて「フルシチョフ礼讃論」をやっつけるプロパガンダをくりひろげなければならない。さきにみた宮本書記長の「記者会見」ののちに発表されたこの種のプロパガンダの「先駆的」一例としてあげられるのは、「前衛」第二三〇号（一九六五年一月）に載せられた座談会『フルシチョフ礼讃論のゆくえ』である。この座談会の参加者は、川端治・早川治・榊利夫・宮森繁の四氏で、いずれも「日共指導層」の構成メンバーと目される人物ばかりであるが、そのなかでいちばん多くしゃべり、いちばん高い声を張

り上げているのは、もちろん、第二二回大会に出席して教祖に懸命の拍手をおくり、フルシチョフ礼讃の大論文をつづけさまに二つも書きまくった歴史的大人物、榊利夫氏である。つい先きごろまで「フルシチョフ礼讃」の音頭をとって「点数をかせいでいた」手合いが、「フルシチョフ礼讃論のゆくえ」などという題目をかかげて、よくもまあ、しゃあしゃあとしゃべれたものである！　これほど醜悪でよこしまな、勤労人民をふみつけにしたやり口が、ほかにあるであろうか！　その陋劣な、「罪業湮滅（イン）」的おしゃべりの見本をひとつふたつ、つぎにお目にかけよう。

（司会者、宮森繁氏の冒頭の発言のなかから）

「一〇月二一日のアカハタに発表された記者団との対話のなかで宮本書記長が『フルシチョフを中心とするソ連共産党指導部の政策のもつ矛盾がこういう形で現われたという意味において非常に重要な事件だと考える』といっているように、フルシチョフの解任が、かれを中心にしてソ連共産党指導部のとってきた諸政策の矛盾の一つの爆発的な現れ、現代修正主義の破たんの現れであるということはまちがいありません。これで現代修正主義の分裂主義の核が一つくずれたわけです。……

そこで本日は、主として日本においてフルシチョフ礼讃論が、どのようにおこなわれてきたか、また、げんざいどうなっているのか、現代修正主義者はもとより、社会民主主義者、あるいは米日支配層が、この問題をどのようにとらえているかという問題についてお話していただきたい。……

そこで、討議してほしい問題をあげると、第一は、誰が、どのようなフルシチョフ礼讃論をやってきたか、第二には、礼讃論の主要な命題はなんであったのか、さらには思想的修正主義が、必然的にマルクス・レーニン主義党の組織原則の否定に通じ、党破壊工作をやる、こういう問題にもふれてもらったらいいのじゃないかと思います」（前出、三九―四〇ページ、ゴシック体および傍点―山本）。

マルクス・レーニン主義の基本原則を堅持する中国共産党指導部の明確な指摘とはまったくちがって、昨日まで教祖に忠実に追随してきた弟子どもにとっては、「フルシチョフ退陣」は、あくまで「ソ連共産党指導部のとってきた諸政策の矛盾の一つの現われ」としてしか説明することができない。「国際共産主義運動内部の一時的な不団結」を説明するとき

にも、この手合いがつかったのは、同じひとつの言葉――「内部矛盾」である。まるきり正反対の場合にも、いつどんなときにも、この「内部矛盾」という、毛沢東論文から無断借用したたった一つの言葉しか出てこない。「バカの一つ覚え」とは、まさに、この手合いのためにつくりだされたものであろうか。この、わが身第一の裏切り的弟子どもは、台座をおわれた教祖との「腐れ縁」をいちはやくもみ消すことばかり考えて、そのために「フルシチョフ礼讃論が、どのようにおこなわれてきたか」を論ずることがこのさい適切だと思いこみ、なんと、そらぞらしくも、「誰が、どのようなフルシチョフ礼讃論をやってきたか」が「第一に討議してほしい問題」だ、などと述べたてている。

「誰が、どのようなフルシチョフ礼讃論をやってきたか」を問題にするというのか？　それならば、答えは、すでに歴史によってあたえられている。『ソ連邦共産党第二二回大会への日本共産党中央委員会の祝辞』を読むがいい。また、袴田里見氏の二大論文――『日本の「構造的改革論」者によるマルクス・レーニン主義のわい曲』と『壮大な共産主義建設の綱領』――を読むがいい。それでもまだはっきりしないというなら、「代表的理論家」榊利夫氏が精魂かたむけて書きあげた報告論文、『人類の夢を実現する新綱領』と極（キワ）めづきの世紀的大論文、『共産主義の壮大な展望』を熟読するがいい。これらの歴史的文書こそ、まさに、「誰が、どのようなフルシチョフ礼讃論をやってきたか？」にたいする、もっとも的確な、決定的な答えではないか。ところが、あきれはてたことに、司会者の下心ある「問題提起」にこたえて精力的に「フルシチョフ礼讃論」の「批判と非難」をやらかしているのは、なんと、「フルシチョフ礼讃論」の最大の張本人、榊利夫氏そのひとなのである！　例の独自的「品性」にもっとも多くめぐまれた最大の張本人が、その「犯罪事実」をどのようにして言葉たくみに「もみ消してしまう」か、――その職業的詐欺師はだしの手口を示すものとして、つぎに榊氏の発言のひとくだりをあげてみよう。

「フルシチョフ礼讃論といわれるものには、一定の歴史的経過があります。それは、特徴的には、一九五六年の第二〇回大会以後、国際的に相当な規模をもっておこなわれ、かつ増幅されてきた。その頂点は、今年の四月のフルシチョフの七〇才誕生日前後といってよいでしょう。明瞭な『個人崇拝』といってよい。国際的にみても、フルシチョフが〝現代における創造的マルクス主義〟の代表的理論家であり、ソ連に新しい発展をもたらした創造主であるかのような宣伝がなされてきた。『ウニタ』紙の元モスクワ特派員ボッファなどもフルシチョフを『理論家』あつかいしていました。……

それらの命題は多岐にわたり、そして当初は多くがフルシチョフの場当り的な発言だったのが、時がたつにつれて『理論化』が進められ、一つの理論体系にまでいたっている。これを克服していくには、全面的なマルクス・レーニン主義の立場からの検討が必要でしょう。……

……たとえば、『平和共存』を現状維持的なものとし、米ソの協調からしかみない傾向は他の諸国の政策をすべて自己の政策に盲従させようとする考え方で、ここに大国主義があるわけですが、そういうものとからみあっている。それを生み出した思想は、革命的な見地ではなくて、端的にいって、ソ連の経済建設をやって高い生活水準に到達すると、おくれた国の人民や資本主義諸国の人民も『それにみならって革命をやるんだ』という考えです。革命は**内部矛盾**によって起こるというマルクス・レーニン主義の原則の修正でもあるわけです。(4)

同様の思想は、いわゆる平和的移行の絶対化論、プロレタリア独裁の軽視論ともむすびついています。(5) 経済的な要因からだけ問題をみてゆこうとするから、政治的な独裁は必然的に軽視されてくる」（前出、四〇―四二ページ、ゴシック体および傍点―山本）。

（4）ごらんのように、「日共指導層」の面々による「一つ覚え」式用語―「内部矛盾」―の活用は、つぎの四通りである！

① 「帝国主義陣営の内部には内部矛盾があって、それはいっそう深まっている」。

② 「国際共産主義運動の内部にも、内部矛盾があるが、それは、運動がいっそう発展しつつあるからこそ起るもので、不可避である」。

③ 「フルシチョフ路線とソ連共産党指導部とにも、内部矛盾があり、それはフルシチョフ退陣を招いた」。

④ 「革命は、内部矛盾によって起こる」。

なるほど、「いっさいの事物は変化・発展し、その運動はすべて内部矛盾によっておこなわれる」は、一個の真理である！

わが榊氏が、フルシチョフ主義のセールスマンを経て、「日共指導層」のうちの代表的「評論家」に成り上ったという、その変転の過程も、まさしく「内部矛盾」の発動＝利用によるものであろう。

(5) 『第二〇回大会報告』でフルシチョフが述べているように、「いくつかの資本主義国では平和的移行＝『議会の道』が可能だが、その他の帝国主義強国では強力革命が避けられない」として、「二つの道」を示す議論が、なんと、榊氏の口にかかると、「平和的移行の絶対化論」だそうである。つまり、「日共綱領」のように、「国会で安定した過半数をしめることができるならば、平和的移行＝『議会の道』が可能である」という、たった一つの可能性―棚ボタ式想定―だけにしがみついて、「過半数をしめることができない」場合やその他のいっさいの可能性（または必然性）について全然ふれない議論は、「平和的移行の絶対化論」ではなく、これこそが、「条件づき」の「平和移行論」なのだそうである。フルシチョフ教祖の教えを絶対化してつくった「守り本尊」＝「日共綱領」を「合理化」するためには、「絶対化」という日本語の意味をも逆にねじまげなければならないわけである！

「いつでもあとから妥当に是正する」という「品性」の最大限の発揮によってここにデッチあげられた榊氏の「罪業湮滅」的作文の内容をば、客観的な事実によって厳密かつ正確に是正すれば、つぎのような、真実をうつしだした文章がえられる。

「わが国でのフルシチョフ礼讃論といわれるものには、一定の歴史的経過があります。それは、特徴的には、一九五六年の第二〇回大会以後、国内的に相当な規模をもっておこなわれ、かつ増幅されてきました。その頂点は、一九六一年十月のソ連共産党第二二回大会の前後といってよいでしょう。榊利夫氏がその報告論文でフルシチョフを絶讃して『これほどの大演説をぶっつづけにやった大政治家はおそらくあるまい』とほめちぎっているのは、明瞭な『個人崇拝』といってよい。袴田氏、榊氏の国内向け大論文をみても、フルシチョフが〃現代における創造的マルクス主義〃の代表的理論家であり、ソ連のみならず国際共産主義運動に新しい発展をもたらした創造主であるかのような宣

伝がなされてきました。袴田氏などは、フルシチョフを真のマルクス・レーニン主義的『理論家』あつかいしていました。……

それらの命題は多岐にわたり、そしてはじめから終りまでほとんどすべてがフルシチョフの場当り的発言であったのに、榊氏ら『わが国のマルクス・レーニン主義者』どもは、それが『理論化』されているだの、『一つの理論体系』になっているだのと言って、これをかつぎまわりました。これを克服するどころではなく、あべこべに、これを全面的に正しいマルクス・レーニン主義と認めることが必要だと力説しました。……

……たとえば、袴田氏、榊氏らは、フルシチョフの『平和共存』論を熱烈に支持し、そこに大国主義があるなどということはさらさら気がつかず、精力的にこれを宣伝してまわりました。それを生みだした思想は、革命的な見地ではなくて、端的にいって、ソ連の経済建設をやって高い生活水準に到達すると、おくれた国の人民や資本主義諸国の人民も『それにみならって革命をやるんだ』という考えで、これはすでに第二〇回大会報告から明確に打ちだされていたのですが、榊氏らの面々が、この『ソ連邦共産主義社会建設最優先主義』を献身的に支持し、精魂こめて宣伝したことは、すでに周知のところで、榊氏のごときは、『まさに人類の夢を実現するもの』だと絶讃し、『共産党の言行が背離したことは一度もない』といってけんめいの太鼓判をおしたものであります。

同様の思想は、いわゆる『平和移行』論、プロレタリア独裁の軽視論ともむすびついていますが、『日共指導層』は、フルシチョフ教祖に献身的に帰依する忠実無比な弟子としてフルシチョフの『平和移行の可能な条件をそなえた国とそうでない国とを区別する、平和移行論』をもっともっとおしすすめて、『平和移行の可能な場合』だけ説明して、『そうでない場合』についてはほんのこれっぽっちもふれないというようにして、『平和移行の絶対化論』をつく

りあげ、これをその『綱領』の中核にすえることまでしました。これは、まさしく、フルシチョフ式棚ボタ戦術の絶対化であって、この絶対化は、必然的に、『国会で安定した過半数がえられる』ための唯一の方法としての『民主主義と自由』の絶対化とむすびついており、したがって、当然にプロレタリア独裁の軽視、あるいはむしろその排斥という、本来の『性向』にぴったり適合するものとなっています。これこそ、フルシチョフ礼讃論の『美わしき極致』であり、フルシチョフ修正主義の創造的発展ともいうべきものであります。」

このようにして、右の座談会は、「〝フルシチョフ礼讃論のゆくえ〟を、われわれは、さらに追及し、現代修正主義を粉砕するため今後もたたかう必要があると考えます」などという、聞えのよい言葉でしめくくられているのであるが、いったい、この連中は、自分たちがやってきたことを、つまり、野坂氏以下袴田氏、榊氏その他の面々が、第二二回大会を頂点としてフルシチョフを懸命に礼讃し、フルシチョフ主義・フルシチョフ路線の献身的な支持と宣伝を公然と大々的にやらかしてきたことを、わが国の勤労人民がすっかり忘れてしまっているとでも、思っているのであろうか？　とくに榊氏は、つづけさまに大論文を書きまくってその一つを日共機関誌「前衛」に載せて全国にばらまき、フルチショフ礼讃・フルシチョフ主義礼讃のお先棒をば、「党」の権威をかりて精力的にかつぎまわったという、自身の歴史的大活動の事実が、わが国のすべての勤労人民の念頭からすっかり消えうせてしまったとでも、考えているのだろうか？　なんという恥しらずな厚かましさ、なんという見下げはてた根性であろうか!!　この座談会での連中のおしゃべりほど、「わが国のマルクス・レーニン主義者」＝「日共指導層」の鼻もちならない「指導者ぶり」を、勤労人民をふみつけにし愚弄してなおかつ平然としていられる厚顔無恥を、自分の地位や権勢を守るためにはどんな嘘でもデッチ上げでもハッタリでも平気でやってのけるというおそるべき「品性」を、白日のもとにさらけだしたものは、ま

たとないであろう。

とはいえ、同じ「前衛」誌上でのこうした座談会記事だけでは、たとえ「ベテラン」どもがどんなに言葉たくみに権威的嘘っぱちをならべてみせたところで、歴史的事実は、簡単にかき消すわけにはいかない。かつて榊氏がフルシチョフ教祖への全霊的傾倒、献身的帰依を表明すべく精魂こめて綴った大論文の中の、かずかずのきかせどころは、誠実な党員や勤労人民の脳裡にしっかと刻みこまれている。これらの記憶のすべてをば、いかにして「喪失」させることができるであろうか?! もし、真にマルクス・レーニン主義の基本原則を守りとおす誠実なレーニン的共産主義者であるならば、このような立場におかれたとしても、かならずや過去の発言の全面的責任を負い、勤労人民の「記憶」を尊重して、真剣な自己批判をやりぬき、人民への奉仕という本来の責務をりっぱになしとげるべく、けんめいの努力をはらうことであろう。だが、万事を「内部矛盾」の多面的活用によってきりぬけ、「指導的理論家」の地位にありついた小ブル的俗物にたいして、どうして、真剣な自己批判など期待できようか? かれらが助けをもとめるのは、あいもかわらず、独自的「品性」の全面的発露でしかない。榊氏が「フルシチョフ教祖に傾倒する献身的弟子」という「過去」を完全に払拭し、その「記憶」を—勤労人民の脳中から—完全に「喪失」させてしまうという世紀的芸当をやりとげるために考えついた「手」はただひとつ、——フルシチョフ修正主義にたいする批判と攻撃を、「指導者的権威」をもって大々的に書きたて、しゃべりまくることによって、「フルシチョフ打倒」の「世紀的旗手」という「地位」をいちはやく—「先駆的に」! —獲得してしまうこと、これである。このようにして、急遽作製され出版されるにいたったのが、実に、榊氏の最高傑作のひとつ、『現代修正主義とはなにか』(一九六五年十月刊行)という、意図的表題の小冊子なのである。

四

フルシチョフ教祖をいくら口をきわめて非難・罵倒し、これまでフルシチョフ教祖とフルシチョフ路線を支持・絶讃してきた榊氏自身の主張と真っ向うから矛盾する言葉を並べたてるという強硬手段に訴えてみても、誠実な党員や勤労大衆の脳裡にきざみこまれた「フルシチョフ教祖への献身的高弟」という榊氏の映像は、容易に拭い去れるものではない。そこで、独自的「品性」に底知れずめぐまれた榊氏は、さらに一歩をすすめて積極的に、榊氏ら「日共指導層」じしんの「正当性」を合理化して、これを読者に呑みこませてしまおうという、巧妙な術策を周到にも張りめぐらすことを考えついたのである。その術策の第一は、「これまで『日共指導層』がフルシチョフの主張を支持してきたのは、当時としてはなんらやましいものではなかった、フルシチョフの主張は、あるときは正しく、あるときは正しくないというように、ジグザグの道をたどっていたのだから」というように言いくるめてしまうものであり、その第二は、同じ『平和移行』論であっても、フルシチョフのそれは完全にまちがっているが、それをそのままひきうつした「日共綱領」の「棚ボタ式戦術」は全面的に正しいものだというように議論をはこび、この詭弁を「日共指導層」の権威をもっておしとおそうとするものである。例の独自的「品性」のいわば「悪しき極致」ともいうべきこれら二つの術策の実効のほどについては、やはり、それ相当の吟味を加えてみなければならないが、しかしそのまえに、豹変的「品性」の豊かさで傑出した世紀的大人物があやつる「論理」がどんなに常軌を逸したけたはずれのものかということについて、十分正確な予備知識をもっていることが、このさい必要不可欠と考えられる。とりわけ、榊氏が「哲学者兼評論家」というふれこみであれこれ物を書きたてて誠実な党員や勤労大衆を引き廻しているという実

情にかんがみるとき、このことはきわめて緊切だということができる。そこではじめに、氏の主著『現代修正主義とはなにか』の第二章「修正主義にかんする基本的な理論問題」の「2　修正主義の二、三の哲学的考察」のうちの、とくに「修正主義の認識論上、思想方法上の盲点」と銘うたれた一節をとりだして、その中味のほどを吟味してみよう（①、②……は、山本のつけたもの）。

「修正主義の認識論上思想方法上の盲点

①　修正主義者が『創造的発展』とかいいながらマルクス主義の根本原則と人民大衆の利益からはなれていくとき、マルクス主義をもっともきらっているはずの連中が、『真の創造的マルクス主義』などといって、きまって修正主義者をもちあげる。だが、認識論的にみれば(?!)、修正主義とは実に粗雑で、一面的なものである。

②　よく知られている(?!)ように、理論といわれるものは、どんな理論であっても、森羅万象にわたってもれなく(?!)照明をあてているわけではない。たとえば、すぐれた理論物理学上の理論も社会法則(?!)を明らかにすることはできない。ある分野のすぐれた正しい理論であっても、その分野の現実のもっとも一般的な諸側面(?!)をとりだし、解明しているにすぎない。つまり、現実のなかのもっとも本質的、確定的なもの(?!)を明らかにしているのである。これは科学的理論の価値(?!)を低めるのではなくて、逆にここに理論の力がある。

③　というのは、現実の諸現象のなかの一般的、本質的なものを確定している(?!)がゆえに、科学的理論は真実なるものを明らかにして、未来を予見できる(?!)のである。もし、あやふやなもの(?!)を組みこんで『これが創造的理論でございます』といっていたのでは、こんな〝理論〟はあぶなっかしくて導きにはならない。

④　ところが、現実は変化・発展をとげていくので、所与の理論にふくまれている知識と現実の変化(?!)が大きければ大きいほど、以前の知識の真理性は相対的に(?!)少なくなっていく(?!)のである。これが知識の相対性である(?!)。したがって(?!)、科学的な理論が正しく発展するためには、つぎのことが要求されてくる。第一は、新しい現象を正しく評価し、新しいものと古い不要のもの(?!)との関係を正しく理解することである。第二は、理論そのものの役割を正しく評価することである。第三は、理論と実践の関係を正しく理解することである。マルクス・レーニン主義を発展させる場合にこれらの要求から足先を(?!)ふみはずすとこ

ろに、修正主義の認識論上の(?!)根源がある。

⑤　客観的な現実がたいそう変化して、以前の理念(?!)や表象(?!)が合わなくなれば、おそかれ早かれこれをあらため(?!)なければならなくなるのは当然である。マルクス主義理論の場合でもこのようなことはありうる(?!)。ところが修正主義の場合は、変化・発展した現実に照応してマルクス主義理論を検討(?!)・発展させるのではなくて、マルクス主義の理論の本質的な原則を主観主義的に(?!)、非科学的に(?!)検討しはじめる。

⑥　すなわち、現実を主観主義的に(?!)とらえて特定の現象を大げさに見たて、マルクス主義の理論的諸原則を一面的にとらえながらこれに『通暁した』と錯覚し(?!)、マルクス主義理論と実践との関係を一面的にとらえてマルクス主義が実践に立ちおくれていると断じる。そのあげくとして、『マルクス主義の理論の基本がふるくなった、現実にあわなくなった』と主張しはじめるのである。

⑦　弁証法的唯物論がおしえるように、運動・変化は絶対的であり、安定は相対的である。したがって、実践のほうが理論よりも優位する。しかしこの場合も、安定的なものはたしかに存在するのである。また、理論はたんに実践を記録にとどめる（理論化する）(?!)のではなくて、本質的な過程を明らかにするのである。

⑧　たとえば、マルクスが当時の上昇期の資本主義を分析してから今日まで百年たち、その間に資本主義にもいろいろ新しい現象があらわれてきた。修正主義者たちはこれをとりあげて、『資本主義は変化したではないか』とさけぶ。たしかに変化もおこった。しかし、マルクスが明らかにした搾取制度という資本主義の本性(?!)は不変であり、この本質はきわめて〝安定的〟(?!)である。こうした『安定性』『不変性』をすべからく否定する(?!)傾向は、一つの『相対主義』(?!)ということができる。

⑨　このように修正主義は、認識論上の特徴として、世界の変化性を一面的、主観主義的に絶対化し、世界の基本的法則の不変性＝安定性を過小評価する。そのために、思想方法の上では底なしの折衷主義におちいる。〝新しい〟個々の現象ばかりが過大に目にうつり、これを性急にあれこれまぜあわせ、一つの〝新しい〟理論にでっちあげようとするので、しょせん原則なしの折衷主義にならざるをえないわけである。

⑩　一面性と主観主義におちいれば、それを『合理化』するための奇弁が必要になる。一九五七年のモスクワ宣言も『修正主義的な誤りや政策上の誤り』をもたらすものとして、『弁証法と唯物論にもとづかない……一面性と主観性』をあげている。奇弁は、一面性と主観性をごまかすには都合のよいものである。奇弁は修正主義の思想方法の特質である」（前出、四四―四七ページ

ジ、ゴシック体—榊氏、傍点および(?!)—山本)。

読者諸君、どうかこの一節をよくお読みいただきたい。いったい、ここに述べられているのは、なんであろうか？榊氏は、例によって「権威」ぶって、「**修正主義の認識論上思想方法上の盲点**」などとこけおどかしの表題をつけているが、ここには、「修正主義の認識論」も「思想方法」も全然出てこないし、いわんや「盲点」などというものは、薬にしたくとも見当らない。あるのは、「モスクワ宣言」のなかの言葉の「実に粗雑で一面的な」借用による混乱した作文であって、それは、榊氏自身の「実に粗雑で一面的な認識論上、思想方法上の盲点」をさらけだしており、しかも、その榊氏自身の「認識論上、思想方法上の盲点」は正真正銘の修正主義のそれと完全に一致するものだという事実をば、この上もなくはっきりと示しているのである。つぎに、右の一節のなかから、修正主義そのものについての説明らしいものをあらいざらいすっかり拾いあげてみてみよう。

イ「修正主義とは実に粗雑で、一面的なもの。」①

「マルクス主義理論の本質的な原則を主観主義的に、非科学的に検討しはじめる。」⑤

「マルクス主義の理論的諸原則を一面的にとらえ……マルクス主義理論と実践との関係を一面的にとらえ、」⑥

ロ「これらの要求から足先をふみはずすところに、修正主義の認識論上の根源がある。」④

「マルクス主義が実践に立ちおくれていると断じる。『マルクス主義の理論の基本がふるくなった、現実にあわなくなった』と主張しはじめる。」⑥

「修正主義者たちは『資本主義は変化したではないか』とさけぶ。」「こうした『安定性』『不変性』をすべからく否定する傾向は、一つの『相対主義』ということができる。」⑧

「修正主義は、世界の変化性を一面的、主観主義的に絶対化し、世界の基本法則の不変性＝安定性を過小評価する。」⑨

ハ「思想方法の上では底なしの折衷主義におちいる。〝新しい〟個々の現象ばかりが過大に目にうつり、これを性急にあれこれまぜあわせ、一つの〝新しい〟理論にでっちあげようとするので、しょせん原則なしの折衷主義にならざるをえない。」⑨

「奇弁は修正主義の思想方法の特質である。」⑩

まず、イとしてまとめられたものを見ていただきたい。いったい、「一面的」と「主観主義的」とは、修正主義の特徴であろうか？　とんでもない、これは、修正主義ばかりでなく、ほとんどすべての理論上、実践上の誤りに共通のものである。榊氏は、⑩で、ことさら「一九五七年のモスクワ宣言も」などといって、その「権威」を借りて「修正主義の認識論上思想方法上の特徴は、一面性と主観主義である」などという主張を「でっちあげ」ているが、これなどは、榊氏の「権威的盗用」の無原則性と底知らずのこじつけ癖とを示すだけのものである。榊君よ、自分で書いた文字を、目をあけてよく読みかえすがいい。君自身の文章が、「モスクワ宣言も『修正主義的な誤りや政策上の誤り』をもたらすものとして、『弁証法と唯物論にもとづかない……一面性と主観性』をあげている」となっているのが、見えないのか？「政策上の誤り」も「一面性と主観性」から生まれると、自分で書いているではないか。そればかりではない、ここにあるのは、「モスクワ宣言」の中の文章ではなくて、君が捏造した文章ではないか。いったい、君は、「モスクワ宣言」の中の文章を正確に読みとることができないのか？　意識的にか無意識的にか「宣言」の中の文字が読みとれない「哲学者」のために「宣言」のなかから関係個所をふくむパラグラフ全部を引用してつぎにかかげてみよう。

「マルクス・レーニン主義の理論的基礎は、弁証法的唯物論である。この世界観は、自然、社会、人間の思惟の一般的発展法則を反映している。この世界観は、過去、現在、未来をとわず有効である。弁証法的唯物論に対立するものは、形而上学と観念論である。マルクス主義政党がいろいろの問題を検討するさいに弁証法と唯物論にもとづかなければ、それは一面性と主観主義を生み、思想を硬化させ、実践から遊離させ、事物や現象を正しく分析する能力を失わせ、修正主義的または教条主義的な誤りや政策上の誤りをもたらす。実践活動で弁証法的唯物論を適用し、基幹

活動家と広範な大衆をマルクス・レーニン主義の精神に立って教育すること――これこそ、共産党・労働者党の緊急な任務の一つである」（傍点および傍線―山本）。

読者諸君、どうか、「宣言」の中の傍線をひいた個所と榊氏の文章とを、よく読みくらべていただきたい。「宣言」は、はっきりと、「弁証法と唯物論にもとづかなければ」、かならず「一面性と主観主義を生みだす」し、「思想を硬化させ、実践から遊離させ、事物や現象を正しく分析する能力を失わせ」、そのために「修正主義的または教条主義的な誤りや政策上の誤りをもたらす」と主張している。ところが、わが榊氏は、「モスクワ宣言も」などと書いて、さも「モスクワ宣言」の方が榊氏の主張に同調しているかのようにおわせ、しかも、自分がその作文全体を無断で借りてきた当の「宣言」の内容を完全にゆがめ、改ざんして、「宣言」が『修正主義的な誤りや政策上の誤り』をもたらすものとして、『弁証法と唯物論にもとづかない……一面性と主観性』をあげている」などと書きたて、これによって、「一面性と主観性とは修正主義の特徴であり、その認識論上、思想方法上の盲点である」という自説を「合理化」しようとしている。「宣言」は、「弁証法と唯物論とにもとづかない」ときには必ず「一面性と主観主義」におちいる、それは、「修正主義的または教条主義的な誤りや政策上の誤り」をもたらす、と述べているのだ。わが「哲学者」は、「修正主義の二、三の哲学的考察」をするというふれこみで、「修正主義の認識論上、思想方法上の盲点」などというこけおどかしの表題をかかげてはみたものの、さて、その中味はどこからとってきたものかと考えたが、――名案も浮ばず、手っとり早いところで「宣言」の中の「修正主義」という文字に飛びつき、前後の脈絡も全体の意味もろくろく読みとらず、「一面性と主観主義」という文字を「修正主義的な誤り」に直結させ、「一面性と主観主義こそ、修正主義の特徴であり、その認識論上、思想方法上の盲点である」などという、素人だましの迷文をでっちあげたものである。そのためには、「宣言」の中の「また

は教条主義的な」という明白な文字を塗りつぶすことなど、この「哲学者」にとっては、朝飯前である。「宣言」の文字を削り、改ざんして安直に拾いあつめた言葉で修正主義の「特徴づけ」をでっちあげ、このでっちあげをば「宣言」の「権威」をかりておしつける、――これはまたなんという、無断盗用＝改ざん常用の超弩級修正主義者であろうか！　「または教条主義的な」という「宣言」の文字が明示しているように、「一面性と主観主義」とは、「思想を硬化させ、実践から遊離させ、事物や現象を正しく分析する能力を失わせ」るものであって、ほとんどすべての理論上・実践上の誤りを生みだすものであるのだ。これをひとり「修正主義」だけの特徴にするとは、なんとあきれた、反「弁証法的唯物論」者、反マルクス・レーニン主義的「哲学者」であろうか！

ハの項についても、イとまったく同じことがいえる。いったい「折衷主義」をとらえて「修正主義の思想方法」であるなどと、いえるだろうか！

だが、なんといっても、榊氏の愛用する「権威的たわごと」の傑作は、最後の文章――「奇弁は修正主義の思想方法の特質である」――である。なんと、「奇弁」が「思想方法」だそうである！

この榊氏自身の一文以上に、万事「権威的詭弁」で片づけるという、榊氏自身の「思想方法の特質」をくっきりあらわしているものはない。ついでながら、②と③のなかにも、これにおとらず愚劣な「権威的詭弁」がすくなからず見いだされる。(6) いや、愚にもつかぬ「権威的な詭弁とたわごと」をもって②と③を「でっちあげ」ている、といったほうが当っている。一例として、「理論といわれるものは、どんな理論であっても、森羅万象にわたってもれなく照明をあてているわけではない。たとえば、すぐれた理論物理学上の理論も社会法則を明らかにすることはできない」というくだりをお読みいただきたい。これほど、榊氏自身の「認識論上思想方法上の無原則性、その底なしのでたらめさ」を明示している

ものがあろうか。「どんな理論でも、森羅万象にわたってもれなく照明をあてているわけではない」!! 「すぐれた理論物理学上の理論も社会法則を明らかにすることはできない」!! なんという、もったいぶったたわごと! なんという、こけおどかしの超ノンセンス!

(6) ③の「もし、あやふやなもの……」以下をごらんいただきたい。これが「修正主義の認識論、思想方法」を論ずるさいの、「哲学者兼評論家」の文章だそうである。「あやふやなもの」が「あぶなっかしい」のは当りまえのことで、こんなばかばかしい同義反復的文章を綴ることができるのは、例の独自的「品性」の持主だけである。こういう連中にかぎって、「国会で安定した過半数がえられれば……」などという、「棚からボタ餅」どころか、もっとずっと「あやふやなものを組みこんで、これが『創造的綱領でございます』などといって」誠実な党員や勤労大衆をたぶらかして平気でいるのである。

ロは、ちょっと見ると、どれももっともらしいことが述べられているようである。だが、すこし注意すれば、**イ**、**ハ**と同様、「権威的」たわごとの羅列にすぎないことがわかる。まず、ここに述べられているのは、修正主義者の主張のほんの一部分だけ、しかも修正主義の本質的特徴とは直接関係のないものばかりである。これらを並べて「修正主義の認識論上、思想方法上の盲点」だなどと称しているのは、まさに「権威的」たわごとでしかない。いったい、「実践に立ちおくれている」とか、「現実にあわなくなった」とか、「資本主義は変化したではないか」とかいう主張は、「認識論上」の主張なのか、それとも「思想方法上」の主張なのか?! ④の「これらの要求から足先をふみはずすところに、修正主義の認識論上の根源がある」などという文章も、榊氏自身の「認識論上、思想方法上」の「底なしの混乱と逆立ちぶり」を示すだけのものである。「これらの要求から足先をふみはずす」ところに「修正主義の認識論上の根源」など、あるものではない。そこにあるのは、まさに「修正主義」そのものなのだ。もし、素人だましの「根源」という言葉を生かしたいというのであれば、「これらの要求から足先をふみはずすところに、修正主義の誤謬の根源がある」というべきである。と

ころで、文章の体裁そのものは、このようにして一応まともなものに「訂正」されるが、しかし、内容的には、まだまだ問題がある。そもそも、「これらの要求」をひきだしてくる榊氏の「前おき」そのものが、例によって支離滅裂で、完全な俗物的・修正主義的主張なのである。そこで、つぎに、右の一節の中に示されている榊氏自身の積極的な主張に、照明をあててみることにしよう。さきの場合と同じように、まず摘記してみよう。

a　「ある分野のすぐれた正しい理論であっても、その分野の現実のもっとも一般的な諸側面をとりだし、解明しているにすぎない。つまり、現実のなかのもっとも本質的、確定的なものを明らかにしている。」②

b　「現実は変化・発展をとげていくので、所与の理論にふくまれている知識と現実の変化が大きければ大きいほど、以前の知識の真理性は相対的に少なくなっていくのである。これが知識の相対性である。」④

「客観的な現実がたいそう変化して、以前の理念や表象が合わなくなれば、おそかれ早かれこれをあらためなければならなくなるのは当然である。マルクス主義理論の場合でもこのようなことはありうる。」⑤

c　「運動・変化は絶対的であり、安定は相対的である。したがって、実践のほうが理論よりも優位する。しかし、この場合も、安定的なものはたしかに存在するのである。」⑦

「搾取制度という資本主義の本性は不変であり、この本質はきわめて〝安定的〟である。こうした『安定性』『不変性』をすべからく否定する傾向は、一つの『相対主義』ということができる。」⑨

aの主張は、混乱と誤謬のごたまぜである。まず、「ある分野のすぐれた正しい理論であっても、その分野の……をとりだし、解明しているにすぎない」というのは、さきにみたものと同じく、まったく愚かしい「権威的」たわごとである。つぎに、理論が「現実のもっとも一般的な諸側面をとりだし、解明しているにすぎない」というのは、完全な誤りである。理論は「現象の本質的な関係」を、つまり、「法則」を明らかにするものである。「現実のなかのもっとも本質的なもの」というだけでは、「現象と本質との関係」が見失われ、肝腎の「法則」が脱落してしまう。「法則」をぬきにし

て「理論」などを論ずるのは、そのこと自体、典型的な俗物的見地をさらけだしたものである。理論が「現実のなかのもっとも確定的なものを明らかにしている」という言葉も、曲解と混乱を示している。ただしくは、理論とは「法則」を、つまり、「現象における恒久的なもの」を明らかにする、と言うべきである。「法則」をおいだしてしまった俗物的見地から出てくるのは、**b**、**c**にみられるような、おどろくべき反マルクス主義的主張、俗物的相対主義のおしゃべりである。

bの二つの文章は、完全に誤りであるばかりか、「実に粗雑で一面的な」俗物的観念論の見本でしかない。まず、榊氏は、「理論」と「知識」とをばらばらにきりはなす、――「所与の理論にふくまれている知識と現実の変化が大きければ大きいほど」。そして、これからあとは、「理論」は全く消え失せて、かわって「知識」と「理念や表象」が登場し、つぎのような典型的な俗物的主張がでてくる、――まず、「客観的現実は変化・発展する」、すると、「以前の知識、以前の理念や表象は合わなくなり、その『真理性』は少なくなる」、そこで、「これらの知識、理念、表象は早晩改められなければならなくなる」。いったい、ここにあるのは、なんについての説明であるか？　これは、小ブル的俗物の「知識」、ブルジョア的観念論の「理念や表象」についての、つまり、ブルジョア的「理論」についての説明である。ブルジョア的観念論の見地、俗物的見地に立てば、「現実」は「不動のもの」「確定的なもの」と考えられ、その「不動の現実」についての「知識、理念や表象」をもって「理論」をでっちあげる。それだからこそ、「現実」が「変化・発展」すれば、その「知識、理念や表象」は役に立たないものになり、その「理論」は「改められなければならなくなる」のだ。しかし、マルクス・レーニン主義の見地、唯物弁証法の見地からみれば、「現実」はけっして「不動のもの」「確定的なもの」ではなく、その反対に「つねに運動するもの」「可変的なもの」である。その「運動・変化する現実」について

「本質的な関係」を、つまり「法則」を明らかにしたものこそが、真に科学的な理論なのである。それゆえ、この「法則」は、「運動・変化する現実」についての「法則」であり、「現実の運動・変化」にかんする「法則」でなければならない。したがって、「現実」の「変化・発展」によってその科学的理論が「間に合わなくなったり」、おどろいて「改める」などということはけっしておこらない。まさに、それと正反対である。科学的理論は、「法則」を把握することによって、その「現実」の「変化・発展」の必然性を、その「変化・発展」の方向とあり方を、――「現実」の「変化・発展」がおきるまえにすでに――明確にすることができるし、また明確にしているものでなければならぬ。「理論」が真に科学的な理論の名に値するかどうかは、「現実」の「運動」、つまり、「変化・発展」によって、――しかも、人間主体の側からの働きかけ＝実践によって生ずる「変化・発展」によって――はじめて検証されるのであり、そして、この点にこそ、「理論と実践との正しい関係」が、すなわち、「実践を通じて真理を発見し、さらに実践を通じて真理を実証し、真理を発展させる」という、マルクス・レーニン主義的見地における「理論と実践との統一」が、存する。ここにこそ、真の科学的理論の「価値」があり、その「力」があるのである。(7)

(7) 榊氏は、②のなかで、「理論が、本質的なもの、確定的なものを明らかにしている」ところに「理論の力」がある、などと述べたてている。つまり、「確定的なもの」を明らかにしているために、「現実」が「変化・発展」すると「間に合わなくなり、改められなければならなくなる」のが「理論の力」だというのである。なんと、たいした「理論の力」の発見者ではあるまいか！

榊氏が、権威ぶって、「これが知識の相対性である」などという迷文句をかかげているのは、実は、「ブルジョア的知識の相対性」のことなのである。だから、この迷文句は、榊氏自身の底知れないブルジョア的・俗物的見地を「確定的」に示す名文句でもあるのである。ところで、このようにブルジョア的・俗物的見地にしがみついている当の榊氏

が、「知識の相対性」などというマルクス主義的表現を、どうしてここでつかっているのかという、当然の疑問がここに生ずる。このマルクス主義的表現は、いったい、どこからもってきたのか？　この当然の疑問を解きあかすのは、例によって、「無断借用（剽窃）＝改ざん」という、「わが国のマルクス・レーニン主義者」特有の「品性」発露である。おそらく、わが「でも哲学者兼評論家」は、右の表現を、レーニンの『哲学ノート』のなかから拾いあさってきたものと推察されるのである。いったい、「知識の相対性」という言葉の真のマルクス・レーニン主義的意味は、どういうものであるのか？　われわれは、「無断借用＝改ざん」の常用者などの意図的「媒介」をしりぞけて、直接に、レーニンの労作にあたってみよう。ヘーゲル『論理学』の第三巻概念論、第一篇主観性、第三章推論、B反省の推論、b帰納の推論、の中の叙述にかんして、レーニンは、つぎのように記している。

「もっとも単純な帰納の道によって得られたもっとも単純な真理もつねに不完全である。なぜなら経験というものはいつまでも完結しないものだからである。したがって、帰納は類推―推定（科学的予見）と結合されなければならない。そしてあらゆる知識は相対的であるが、認識の前進の各々の一歩のうちには絶対的な内容がある」（全集第四版、第三十八巻、一七一ページ、傍線および傍点―山本）。

そして、さらにレーニンは、右の第三章推論の叙述内容に関連して、ヘーゲル『エンチクロペディー』の第三部概念論、A主観的概念、c推論、イ質的推論の「第一八七節の補遺」のなかの叙述をば、「注意」という文字を冠してつぎのように摘記し、この叙述についてさらに下記の注記を加えている。

「《推論の諸格の三つの格の客観的な意味は、あらゆる理性的なものが三重の推論として示されるということ、すなわち、その各項はいずれも端項の位置を占めるとともに、また媒介する中間項の位置を占めるということである。

たとえば、哲学の三部門をなす論理的理念、自然および精神がそうである。ここではまず自然が中間項、連結する項であって、自然すなわちこの直接的な総体性は、自己を展開して論理的理念および精神という二つの端項になる≫。

≪しかし精神は自然によって媒介されていることによってのみ精神である≫……≪精神は、自然のうちに論理的理念を認識し、こうして自然をその本質にまで高めるもののことである。≫……≪論理的理念は≪精神および自然の絶対的な実体であり、普遍的なもの、すべてを貫ぬいているもの≫である≫」（グロックナー版全集第八巻、三九一―三九二ページ、松村一人訳『小論理学』下巻一六八ページ、ただしここにかかげたのは、レーニンが原文から抜いて書き記したもの）。

「『自然すなわちこの直接的な総体性は、論理的理念と精神とに展開していく』。論理学は認識についての学説である。すなわち認識論である。認識は人間による自然の反映である。しかしそれは単純な、直接的な、全体的な反映ではなくて、一連の抽象の過程であり、諸概念や諸法則等々の定式化、形成の過程である。そしてこれらの諸概念や諸法則等々（思惟、科学＝『論理的理念』）こそは、永久に運動し発展している自然の普遍的な合法則性を条件的に、近似的に把握するものである。ここには実際に、客観的に**三つ**の項が、すなわち(1)自然、(2)人間の認識＝人間の脳髄（同じ自然の最高の産物としての）および(3)人間の認識における自然の反映の形式、がある。そしてこの形式が、もろもろの概念、法則、カテゴリー等々である。人間は自然を全体的に、完全に、すなわち自然の『直接的な総体性』を把握する＝反映する＝模写することはできない。人間は、抽象、概念、法則、科学的な世界像、等々をつくりだしながら、永久にそれに接近していくことができるだけである」（前出、一七三ページ、ゴシック体および傍点―レーニン）。

これらのレーニンの指摘と榊氏の主張とをくらべてみれば、両者のへだたり、というよりはむしろ、両者の対立は、一目瞭然である。

レーニンは、「人間は、自然を全体的に、完全に、すなわち自然の『直接的な総体性』を、把握することはできない。人間は抽象、概念、法則、科学的な世界像、等々をつくりだしながら、永久にそれに接近していくことができるだけである」と述べ、同様の思想を、「あらゆる知識は相対的であるが、認識の前進の各々の一歩のうちには絶対的な内容がある」と言いあらわしている。レーニンは、人間が完全な、絶対的な真理を把握することはできないという意味で「知識の相対性」を指摘し、しかも「認識の前進」によって一歩一歩それに接近していくことができると述べている。ところが、榊氏は、なんと、「現実は変化・発展をとげていくので、以前の知識の真理性は相対的に少なくなっていくのである」などと述べたてている。つまり、「現実の変化・発展」につれて「以前の知識の真理性はますます相対的に少なくなっていく」ので、「以前の知識」は「ますます古い不要のもの」となる、というわけである。レーニンの「知識の相対性」という言葉を無断借用＝剽窃しながらその内容を正反対のものに改ざんし、レーニンの説明をふみにじるような主張をかかげて「これが知識の相対性である」とふれまわるとは、なんという、あきれかえった反「レーニン主義者」であろうか！　これこそ典型的な俗物＝裏切り的修正主義分子でなくてなんであろうか！　榊氏の俗物的・修正主義的本質は、「理念」や「表象」などという、ブルジョア的観念論の基本概念をそのまま採用している点にもはっきり示されている（⑤）。「マルクス・レーニン主義の認識論にとっては『理念』などまったく問題にならない」という基本知識をちーっともしらない「マルクス・レーニン主義者」＝「哲学者」が、いったい、いるだろうか！　「表象」などは問題ではなくて、まさに「本質的な関係」が、「概念」、「法則」こそが問題なのだということがすこしもわからない「指導的理論家」＝「哲学者」が、いったい、いるだろうか?!　こういう似而非「マルクス・レーニン主義者」、ブルジョア的「哲学者」が「科学的な理論」といっているのは、「その真理性が相対的に少なくなっ

ていくような知識」と「理念」と「表象」との三つから成る観念的ごたまぜにほかならないのであって、このような「科学的理論」＝観念的ごたまぜが「正しく発展するためには、つぎのことが要求されてくる」などといって、三つをあげている(③)が、その「第一」が「古い不要のもの」などという典型的な修正主義的主張を示したものであり、「第二」と「第三」が、内容からっぽの、借り物のおしゃべりに終っているのは、当然である。ことに、その「第三」の「理論と実践の関係を正しく理解すること」というのは、誰でも口にするものであるが、その意味は、つぎのcでの榊氏自身の説明が示しているように、完全に改ざんされ、ゆがめられたものでしかないのである。

cの⑦の第一の文章―「運動・変化は絶対的であり、安定は相対的である」―は、一見してわかるように、「すべての過程の恒常性は相対的であるが、ある過程が他の過程に転化するという変動性は絶対的である」という文章[8]を安直な、まちがいだらけの形に引き写しただけのものである。この後者の正しい文章は、レーニンの手稿『弁証法の問題について』のなかのつぎの叙述に関連して述べられたものであるが、その叙述個所には、つぎのような「注意」(NB)が附記されているのである。

(8)　毛沢東『矛盾論』の「五　矛盾の諸側面の同一性と闘争性」の中の文章。

「対立物の統一（一致、同一、均衡）は条件的、一時的、経過的、相対的である。相互に排除しあう対立物の闘争は、発展、運動が絶対的であるように、絶対的である。

「注意。主観主義（懐疑主義と詭弁、等々）と弁証法との区別は、とりわけ、（客観的）弁証法においては相対的なものと絶対的なものとの区別もまた比較的（相対的）だということにある。客観的弁証法にとっては、相対的なもののうちに絶対的なものがある。主観主義と詭弁にとっては、相対的なものはひたすら相対的であって、

「絶対的なものを排除する」[9]（全集第四版、第三十八巻、三五八ページ、傍点および側線―レーニン、ゴシック体―山本）。

（9）なお、これと同様の趣旨のことを、レーニンは、『哲学ノート』の中でも述べているが、そのなかから一個所を引いてつぎにかかげておこう。これは、ヘーゲル『論理学』第一巻有論、第一篇質、第二章定有、B有限性、(C)有限性、の中の叙述にかんして、レーニンが、「弁証法についての感想。ヘーゲルを読みながら」と傍記して述べている「注意」書きである。

「明敏で聡明だ！　普通には死んだものと思われている諸概念をヘーゲルは分析して、それらのうちに運動があることを示している。有限なものとは？　終りに向って運動しているもののことである。或るものとは？―他のものであるものではないということである。存在一般とは？―存在＝非存在であるような無規定性である。諸概念の全面的な、普遍的な柔軟性、対立物の同一性にまで達する柔軟性、―ここにこそ核心がある。この柔軟性が**主観的に**適用されると、＝**折衷主義と詭弁**。客観的に適用された柔軟性、すなわち、物質的な過程の全面性およびこの過程の統一を反映する柔軟性は、弁証法であり、世界の永遠の発展の正しい反映である」（前出、九八―九九ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

右の本文と注の中でわたしがゴシック体をもって示した言葉に注意するならば、「無断盗用＝改ざん」の常用者が、「修正主義の認識論上、思想方法上の盲点」というこけおどかしの「説明」をでっちあげるための唯一の材料として並べたてた四つの単語―「主観主義、折衷主義、相対主義、奇弁」――を、どこから、どのようにして拾いあさってきたかということが、したがって、その「改ざん＝修正」主義者という本質が、この上もなくはっきりとしてくるのである。

ところで、⑦の第一の文章は、たとえ欠陥だらけだとしても、正しい原文の痕跡だけはとどめている。だが、根っからまちがっているのは、「したがって」にはじまる第二の文章である。この「したがって」という文句から推察すると、「実践」は「運動・変化」に、「理論」は「安定」に、それぞれ直結させられているものと思われる。つまり、②で「理論は確定的なものを明らかにしている」と述べ、④で「現実は変化・発展をとげていくので、以前の知識の真理性は相対的に少なくなる、古い不要なものがでてくる」といい、⑤で「以前の理念や表象が合わなくなるので、早晩これを改めなければならない」と説明し、⑥で「理論が実践に立ちおくれる」と述べているところからわかるように、榊氏の「理論」

というものは、「変化・発展」の法則は全然とらえることができず、「変化・発展」しないもの、つまり「確定的・安定的」なものだけをわずかに一面的にとらえることができるだけのものなのである。こんなへっぽこ「理論」が、「実践」に負けるのは、もとより当然のことである。だが、真のマルクス・レーニン主義の見地からすれば、「したがって実践のほうが理論よりも優位する」などという、一面的な、主観主義的な詭弁は、まったくお話にならないものである。マルクス・レーニン主義は、榊氏のように、「実践」と「理論」とをきりはなし対立させることを、断固として排撃する。両者は、正しく結びつけられねばならず、また正しく統一されているときにはじめて、真の「実践」、真の「理論」であるということができるのだ。(10) 榊氏が⑦のなかで、それまで「劣位」におかれた「理論」に若干重みをつけようと考えて、それは「たんに実践を記録にとどめる（理論化する）のではなくて、本質的な過程を明らかにするのである」という解説をつけているのは、かえって、榊氏自身が、「実践」についても「理論」についても、それこそ一面的な、観念的な、非弁証法的なとらえ方しかできないものだということを裏書きしている。とりわけ、「たんに実践を記録にとどめる」ということをもって、「理論化する」ことだとしているのは、まさに語るに落ちるものというべきである。

(10) 榊氏の流儀のように、「実践」と「理論」とをきりはなし、両者についての俗物的、観念的表象をもって「理論にたいする実践の優位」を説くのは、典型的な修正主義的主張である。両者についての正しい結びつけは、「実践の主導性」という点からなされるべきものであって、この点についての明確なマルクス・レーニン主義的説明は、毛沢東『実践論』の最後の結びの一節の中にあますところなく示されている。

「実践を通じて真理を発見し、さらに実践を通じて真理を実証し、真理を発展させる。感性的認識から能動的に理性的認識に発展し、さらに理性的認識によって能動的に革命的実践を指導し、主観的世界と客観的世界とを改造する。実践、認識、再実践、再認識、というこの形式が循環往復して無限にくりかえされ、その一循環ごとに、実践と認識の内容はより一段と高い

段階にすすんでいく。これが弁証法的唯物論の認識論の全体であり、これが弁証法的唯物論の知と行との統一観である」（傍点—山本）。

それゆえ、⑤で榊氏が告白しているように、「理念」や「表象」などを問題にしているような「感性的」・観念的認識の段階にとどまっている「でも哲学者」が、「認識論」などというこけおどかしの言葉をいくら並べてみせたところで、その中味は認識論のにの字に当るものすらなく、また彼のいう「マルクス主義理論」が典型的な俗物的・修正主義的「マルクス主義論」でしかないのも、理の当然というべきなのである。

最後に、cの第二の文章（⑧）に出てくる「搾取制度」という迷文句に注意しておく必要がある。わが「哲学者兼評論家」は、その哲学的素養の完全な欠如を表明することで非凡な才能を示したものだが、こと経済学については、さらにいちだんとその俗物的・修正主義的本性をあらわにする熱意を示しているようである。いったい、「搾取制度」は「資本主義の本性」であるか？　奴隷制は、「搾取制度」であるのかないのか？　農奴制は「搾取制度」であるのかないのか？　およそ階級社会はひとつのこらず、労働力の担い手の「搾取」なしには存在できないこと、したがって階級社会はすべて「搾取制度」であるということ—これらの初歩的知識を全然御存じないマルクス・レーニン主義者があるであろうか？　「搾取制度」が「資本主義の本性、本質」であるという、榊氏の主張は、完全な誤りであり、「理論的」無知を示すものであり、また、その「本性、本質」が「きわめて〃安定的〃である」という主張も、完全な錯乱であり、「理論的」だぼらでしかない。資本主義は階級社会であり、したがって、ひとつの歴史的・特殊的な搾取制度である。逆にいえば、ひとつの歴史的・特殊的な搾取制度そのものが、資本主義なのである。それゆえ、この歴史的・特殊的な搾取制度と資本主義とは、まったく同じものなのである。この二つの言葉をきりはなし、「歴史的、特殊的」という規定を忘れて、「搾取制度」一般におきかえ、「搾取制度」をもって「資本主義の本質」

であるとするのは、たんに論理的にみても明白な混乱をあらわしている。資本主義と歴史的・特殊的な搾取制度とは全く同じものであって、一方が他方の「本質」だなどというものではない。「搾取制度」が「安定的・不変的」だというのも、誤りである。歴史的・特殊的な搾取制度つまり資本主義そのものが、相対的に「安定的」であり「不変的」であるのだ。ところで、いったい、フルシチョフら修正主義者たちは、資本主義がひとつの歴史的・特殊的な搾取制度であるという事実を、したがって、資本主義＝歴史的・特殊的搾取制度そのものの相対的な、一時的な「安定性」、「不変性」を、一度でも否定したことがあるだろうか?! こうした自明ともいうべき事実を否定するほど、修正主義者は間のぬけた人物ではないのだ。だからこそ、修正主義的潮流は、なかなか簡単には克服されえないのだ。「こうした安定性、不変性をすべからく否定する」から「相対主義」である、「折衷主義」におちいるなどと主張するのは、まったくのこじつけである。これは、はじめから「相対主義」と「折衷主義」というレッテルを—レーニンの著作の中から拾いあさって——用意をしておいて、無理やりそこにおしこめようとしてデッチあげた意図的文章であって、そのこじつけたるや、論理もなにもあったものではないのである。

さて、このようにしてみてくると、「修正主義の認識論上、思想方法上の盲点」というこけおどかしの題目をかかげて並べたてた右の一節の中味は、まったくその題目と関係のない無意味なおしゃべりの連続にすぎない、ということがあきらかとなってくる。そこには、「認識論上」の説明は、ひとかけらもない。また「思想方法上」の問題についても、ひとことの説明もない。あるのは、榊氏自身の脳中にある粗雑な俗物的・修正主義的「思想体系」の混乱した露出と、レーニンの著作から「無断盗用＝改ざん」した四つの単語をレッテルとしてしゃにむにおしつけること、これだけである。ところが、客観的にみると、右の四つのレッテルこそは、奇しくも、榊氏自身の脳中を占める粗雑

な俗物的・修正主義的「思想体系」にとってまさにぴったりのものであることが、おのづから明らかとなってくる。つまり、わが「哲学者兼評論家」榊氏が、その主著の右の一節をばことさら「修正主義の認識論上、思想方法上の盲点」と題して下さり、御自身の積極的な「思想体系」を開陳して下さっているのは、ほかならぬ榊氏自身の「安定的・不変的本性」、つまり俗物的・修正主義者的本質をば、とくに氏自身の「認識論上、思想方法上の盲点」との関連において懇切叮嚀にも例示し解説してひろく天下の蒙をひらこうとする遠大な意図にもとづくものとみられるのであって、このようにみてくると、いつものことながら、榊氏がレッテルの「創造的」製作においてまったく非凡の才能をもっていることに、あらためてほとほと感心させられるのである。

（一九六九・一・五）

（おことわり）本論稿の「榊氏による修正主義批判」は（その四）をもって一応完了する予定であったが、榊氏の主著『現代修正主義とはなにか』の「二大目標」の検討に入るまえにすでに制限紙数をこえるにいたったので、やむをえず、次回第十節を「榊氏による修正主義批判」（その五）として、右の「二大術策」につき十分な検討を加えることにした。このように「目次」を変更したことについて、読者諸賢の諒解をえたいとおもう。